彌陀像

国姓爺忠義傳

十編

九

へ13
4270
3

# 繪本國姓爺忠義傳第卷之九　目錄


第一回　張献忠死漢中

第二回　張献忠行天殺刑之図

第三回　劉進忠殺張献忠之図

第四回　大清定鼎燕京

順治皇帝遣書南京

大清順治帝嫁明長公主于周奎之図

大清之勅使到南京之図

弘光帝徵鄭芝龍



N13
4290
3

森義夫
61.12
寄贈

91-2143

第又回

鄭一貫於日本平戸討紅夷之図

鄭成功近用喫符火箭燒清軍之図

清初丁果山浸波上戰鄭芝豹之図

天妃得感鴻逵擒返間之図

天妃有應之図

鄭鴻逵擒返間之図



# 繪本國姓爺忠義傳初篇卷之九

## 張献忠死漢中

実は張献忠い若年より自成が属なれし七十万の軍兵を引て湖廣乃地と犯し掠め殺す自臣て犯川の境へ入其堂日くに集う殺す成都へ入り国王諸臣と殺し献忠自ら西王と称じ年号を義宝と号し専ら兵と犯して蜀の士女を扣びやし深る者い敵し深ざる者い其妻子と捕へ殿下に引と入殺疋乃大数と呼でこれの猶去むる其教の頼不の者と引出しく殺し芝と天殺と号く年毒病の接こいふりをもって張献忠が暴悪日くに甚しく犯川の民多く山林へ遁と隠の死るに陶献芝自成脱へ乞び呉三桂清の百万話を引て来の総兵九良王と一戦に敗り張献忠と共討んと漢中へ

張獻忠
行天誅刑

四の人に安へられし張献忠大に驚き長漢にて中るい吾蜀の地を得
て國王の登り今既に命を受て滅んとす豈我一人滅ぶべきや蜀
中の軍民のこゝに斬殺し我に従ひ居し滅せんとす先蜀中の文士
受け式数百人石出べし武士に命じて云ふこませ只一附に討殺し拔首
姓を屠殺しの時も首を切ゞに百姓恐を抱のくきに林に走り岩
洞に隠れ石窟にかくむと探り出べく斬殺し是に何の恐れいかゆえ走り
張献忠が先に乃大わ小劉進忠といふ者あり二万誘を招して関
を守り立り此の軍士多く巴川の者なれば献忠ゞ小親と数さ也
妻子を屠られ怒を恐む者数を尽し一夜の間に道に出た良玉
呉三桂が陣に至り陣系を取者三万余人大に進忠も今張献忠
もたのみむくて行く左良玉が陣へ陣を入る左良玉大に拔び進忠

に計を押へ献忠と歎き討む進忠命を聞而乃言て神つけ
厳しく歎を禁ぐの使を遣わし献忠が方へ使を以て歎言乃及
死を希に献忠も何の遠慮にも及ぶ道率に十騎許を引き進
忠が営帯に入る此時進忠並て居村者数十人幕の陰に伏並
に待ひ合せる程に道に献忠が家と同論二ヶ所に対て馬か
ちに命令に進忠剣を抜げ大に呼つて曰く張献忠が暴悪天の敵
さゞ出死を張て深して官軍に降せり背く者い献忠を以て例と
悪く深せんとの後年大に怨を年依して謹で命に従ふ進忠
刎献忠が首を左良玉に置関を開きて官軍を迎へ入る左
良玉呉三桂双に面会ら及び漢中を平定軍を拔さ先て
小帝に陣せり

劉進忠

殺張献忠

大清定鼎燕京

清の摂政王ハ居ながら小京に静め給ひ同年五月初の三日小京城武英殿にて即位あり大清皇帝と称じ年号を順治と改元あり百官の朝賀を受給ふに万歳を呼ふ声天に震ふ真にめでたかりける次第なり呉三桂を遼東に残し世代平西伯に封じ給ふ呉三桂清朝に国を奪はれし恨ありといへども清の勢ひ盛んなる事となりぬればよぎなければ謹で命を領し遼東に赴きけるハ再明の廻復を計んと密に動静を窺ひける順治帝詔りして崇禎帝を懐宗端皇帝と謚し周皇后を烈皇后と謚し神主を帝王の廟に安じ又同六日より八日まで三日性義を挙喪を発して其霊を慰め給ふ是に依て京城の人民順治の盛徳に服し此代



長久と祝ひける順治帝再び詔りして官人以下京城の庶民に至るまで髪を剃明の衣冠を捨て大清の制に遵しむ実にいはゆる国風忽ち一変し小国のまゝなりける則天の志しむる所にして人力のおよびし得がたかりにあらじ家に崇禎帝の御女長平主何新官人に敵ひ順治二年自書をさゝげて出家薙染して先帝の御跡を弔ひ給はんとの御願ひありけるに順治帝其志に感じ給ひて宗廟に詣じ周奎を召出し公主の礼を以て婚せしめ田宅金銀車牛等まで下し給ひ愛し甚深し公主ハ是を受く辞き給ふ身かぎりなし終に病に罹りて薨じ給ふ則彰義門の陽地に葬る張震といふ者文を作て公主を悼む読者涙を流さざるハなし

順治皇帝遺書南京

大唐順治帝
嫡州長公子
于周太王

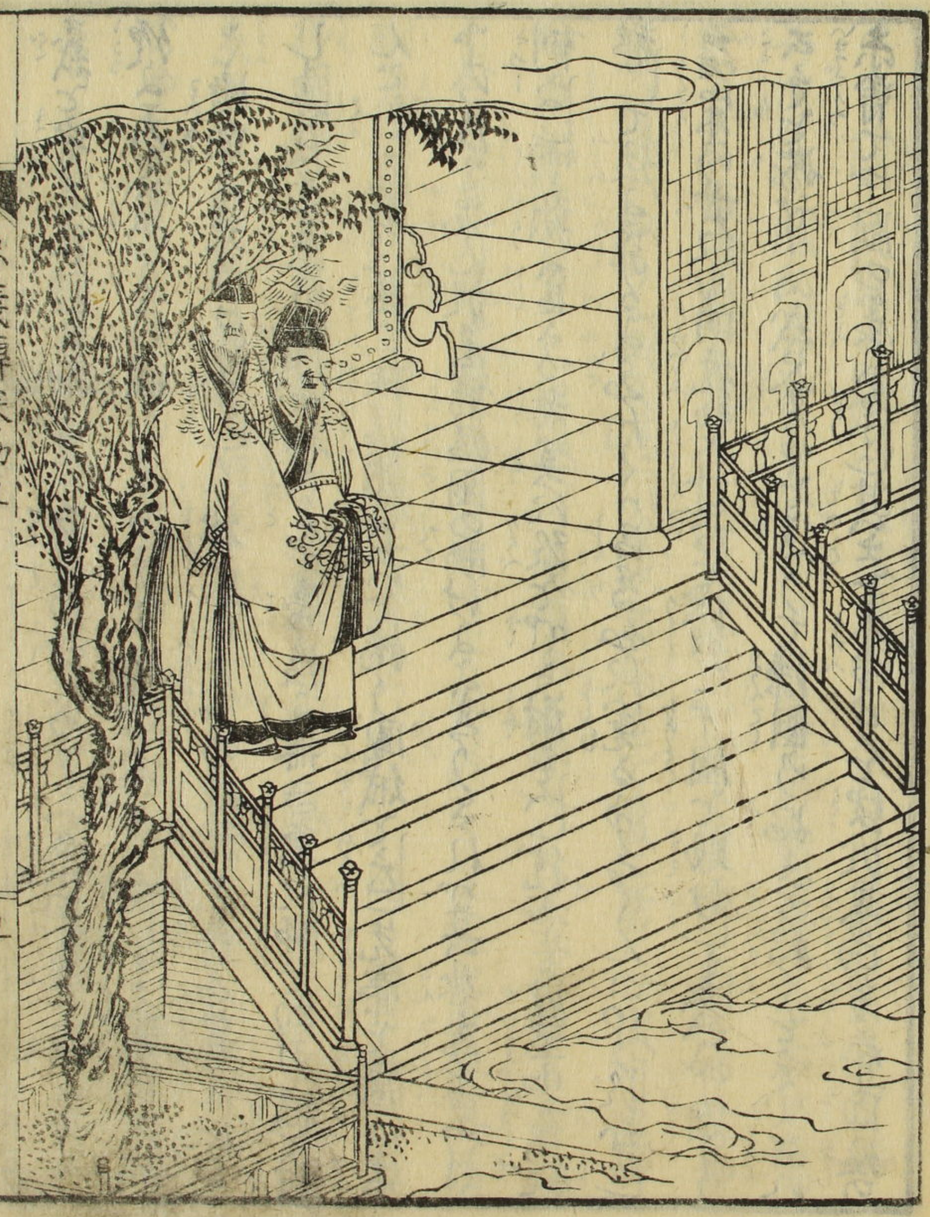
忠義傳卷初九

茲に南京の兵部尚書史可法と云者あり先に國城京城に
孤入して数万の軍兵を集め都を頼んと[illegible]ふ小二月十八日
京師終に陥り先帝社稷に薨じ給ふと聞て南京
の武官等と計議して紘と討んと國の[illegible]も踏躍して急に
離山附先帝の兄福王を御方紘の乱を避て淮南に来り給ひ
と史可法等南京に迎へ入れり天下一日も君なくんばあるべからずと
又月十五日即位ありて年号を弘光と改元あり百官を定め朝儀日
に益々盛なる大難を報ずるに計のく後せらるる紘るに遠東の趙
兵吳三桂韃靼の兵を借り國城を自滅を小京に破り給の羅云
ひて雖と敵[illegible]紘報ふとへども両方とも先達て國城に寄せ
る小京は清の摂政王即位して國を大清と号[illegible]元を順治と改るよ



洋に南京に攻入れば福王大に怯き給ひ百官逃て眼
を覆ども又逆方は其年七月小京の都に順治皇帝の勅使南京
に到る福王先其使を清に國君史可法等を出して降を乞む小京
の勅使順治朝の國書を出し且史可法に向ひて今の清朝の
帝王の禅を受て洗に小京城に都帝業を創め給ふ紘るに南
京の諸臣福王をかばひ給ふ登極せしめ元を弘光と建るの文に謂
は天に二つの日なく國に二つの王なべし福王逃に号を割り貢を
なく清朝の封号を受るば世に侯伯のよしを南京の諸臣悪
く回鶻に依て変るのなべし紘らどんば小軍一数南征せば金陵都
の人民生命を得るの難しと命じて先に清に使史可法を使
者て曰く夫先帝は乙國のまよりに紘臣政を乱逐に登極

大清之勅使
到南京
大清



義を守り社稷を殉し某の外にみづから一度國憂を決し
給ふの天を戴ざるの眼をさらさんと義を辯るの胸望を
を淮南に奉り孤忠を
しまば南京の諸臣相ひ
んと計るに呉三桂清朝の兵を借り鳳紙を
下の民を安んじ光啓清國の助けをまうされば其悲慶を
例に明朝の臣ら希望に
都して後の事をまつ
唐宋の世にも同姓契丹兵を貸て中國を助けしも或中國
云を嫁せしめ或金帛を送りて蒲國の好を
未曾て中國の虞の際に其主を奪ひ其臣を奪ひ皇帝即位の



ちの光を隔むに呉ぞ漢の光武唐の肅宗皆中興の主なるみづから
其位いまだ滅びざるを以て小朝を
姑と志を吾中國を奪んに
の外に遠ひぬらん例の清朝の
倫吾朝廷の重を遠へ鳳紙
を公の忠臣の位を報ずる大義
朝急を百万の兵を卑し逆紙を一戦に滅し明國の讐をむくひぬ
抑明朝を亡ぼしの鳳紙なり
系を仕て清朝を
いつる寛にいもて
まつ忠臣何ぞ二君に仕へ
ちの光を隔むに呉ぞ漢の光武唐の肅宗皆中興の主なるみづから
其位いまだ滅びざるを以て小朝を姑と志を吾中國を奪んに
の外に遠ひぬらん例の清朝の
倫吾朝廷の重を遠へ鳳紙
を公の忠臣の位を報ずる大義
朝急を百万の兵を卑し逆紙を一戦に滅し明國の讐をむくひぬ
抑明朝を亡ぼしの鳳紙なり
系を仕て清朝を
いつる寛にいもて
まつ忠臣何ぞ二君に仕へ

〻〻ば何ぞ山系及び浙西川蜀師を出し國の大仇周紙を討ざらや史可法が曰く忠臣は社稷を輔く師を出しの退速を論せんや侯希笑て曰明朝の儒臣は文章のみ小國を治し小軍若し〻ば一拳の見を得ん〻〻報書を送て何〻と云よ笑ひ小系へ向り名る

## 弘光帝徵鄭芝龍

泉州の鄭芝龍は日本に渡り名氏一貫と改め流寓とるの数年肥前國松浦郡平戸の住家と定むるの紅毛の賈船長崎の港に滯泊同紅毛〻も毎年平戸に来り交易鄭一貫〻も既に〻親しを〻るの武附紅夷碎の際一貫と争論〻劍を接て一貫と刺殺んと〻一貫幸〻せば紅毛が接物する劍を奪ひ一貫を斬り紅毛の痛く撃を加へ居むと平戸の百姓中〻〻混乱



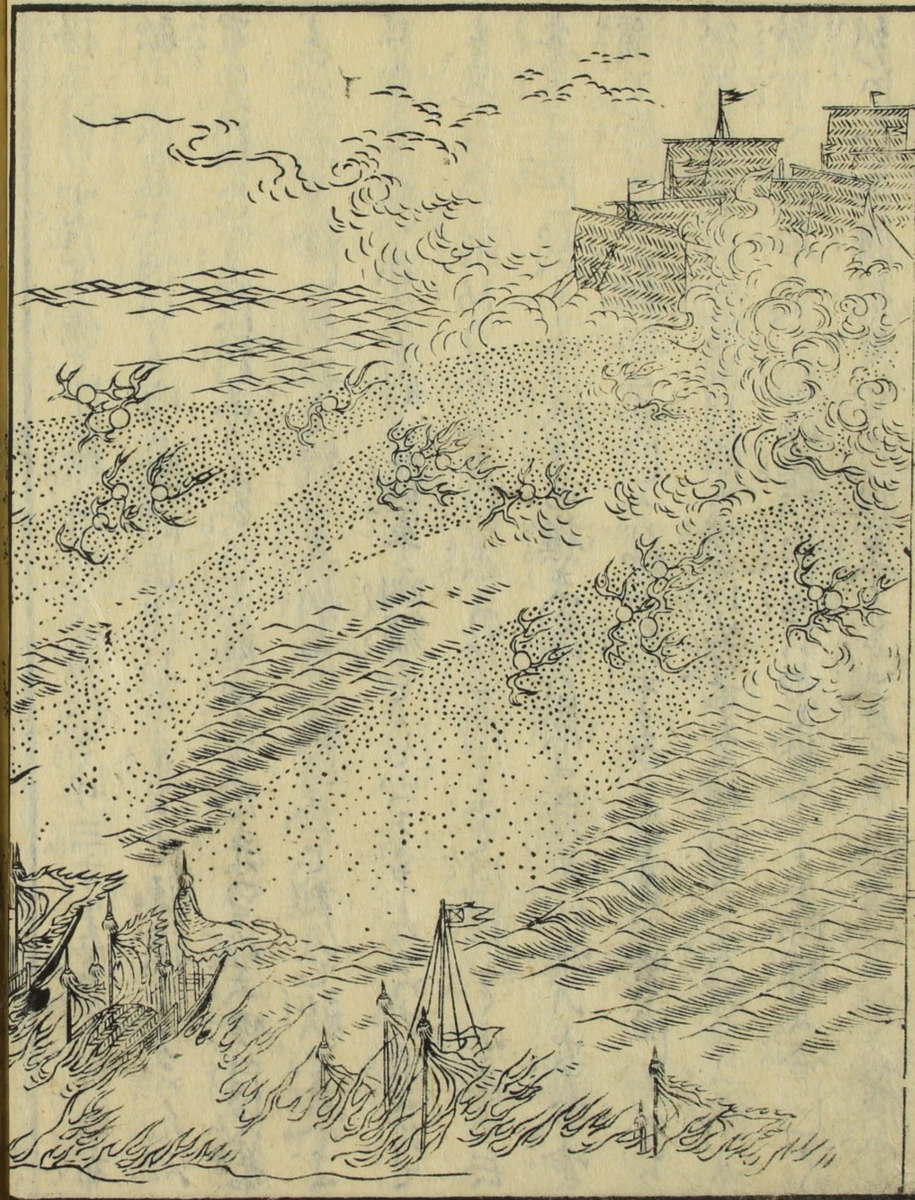
枝けて蜜柏人を殺す紅毛ども数十人や合せ不意に鄭一貫が舍を襲ひ劍戟を震へ〻〻迫へ〻り一貫元来武勇絶倫の強者なれば日本の刀を接ぎ出るを奪ひ例せば紅夷〻も軍兵を繰と〻ども〻〻〻内に数十人悉く斬殺る平戸の郡を後り逃し去を恐れ一母兄と妻子諸〻も長崎の港へ送り後日寛永十年明の崇禎十年泉州の賈柏林元晴と云る者帆の便私に彼の妻子を妻とし其の中國へ帰り妻子城に入て宅内に守り家を南京弘光帝清朝の軍勢と防んの陳潢と云る官人を勅使と去て鄭芝龍と安南柏の射に水軍と率て清兵と防ぎ退けよと云り〻て清〻鄭芝龍既を呼き恩と附且勅書を中る南京の新帝臣が前の状を〻〻て光義せるとも〻〻せ法ひ〻〻騏

鄭一貫於日
本平戸
討紅夷

忠義傳卷九

驍勇老たれども駑馬のごとし如ごとに臣多既に六十の命をいとゞ小虜の
悍兵に当るべき分にあらず臣頗軍器の代て軍を出さしむ
呉洲孫希をして勅使と鄭俊と都督大将軍とし芝弱鄭
粉を左右の先鋒とし函輝をして軍監とし其兵をぞく十余万強
舟楽造り終へる戦艦五百艘を艤し別に兵粮の船三百艘九月
下旬泉州の港より順風に帆を開き東洋をゝく揚子江の澤金山
の巒に艦を繋ぎ清華緒の流を三里斗を奥へ入本寨を擁し江
に軍門を設け行侯船数多往来十万の人煙充とうけるも
驚き騒る勢ひ真に凶ゝくゝ唐順治帝も南京
強いざる式征せんとゝく唐紀龍を大将軍とし丁思山嘯勢を左右
の先鋒とし兵勢十万余の強数百艘の巨船をつゝ孫を出く

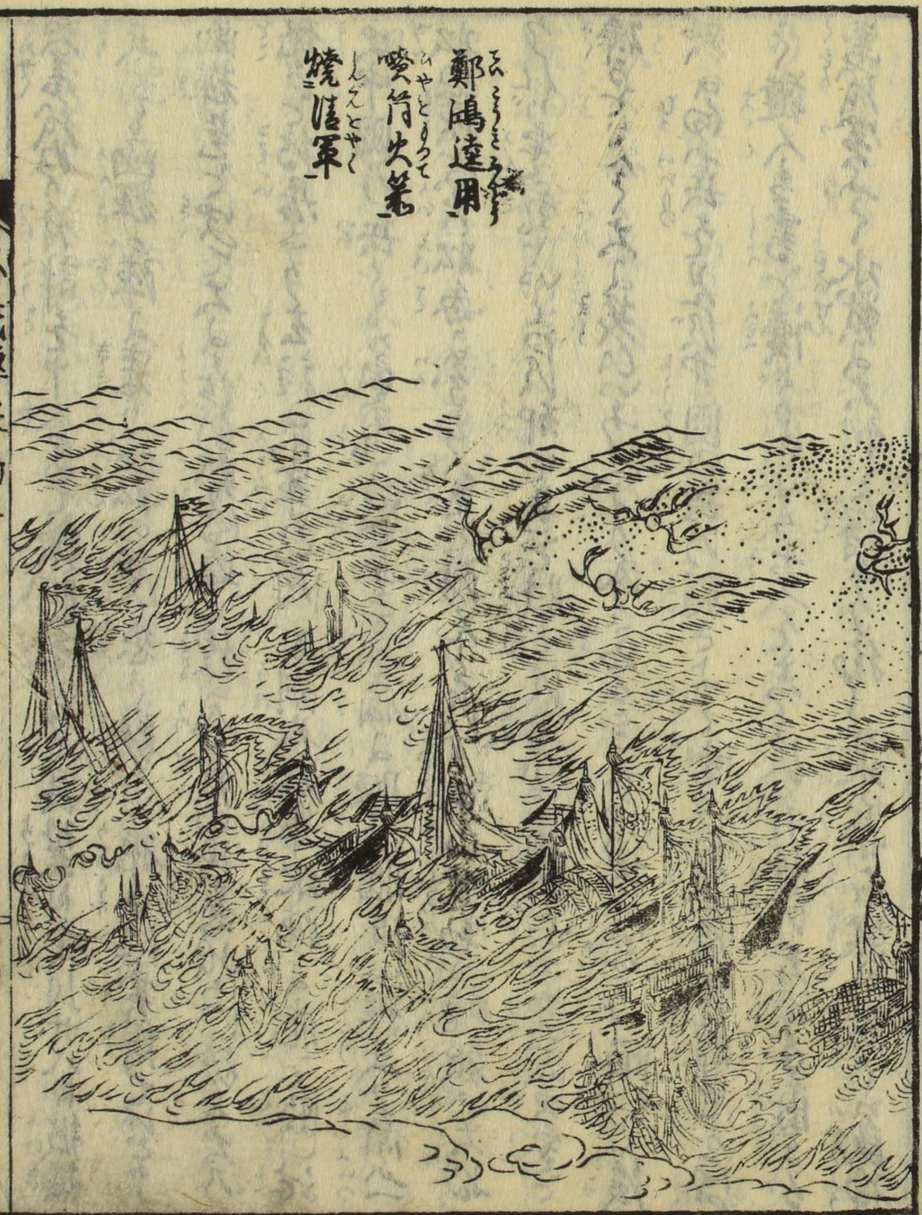
揚子江の小岸を破とし鄭成達が寨に在の三十里要害の水陣を布
敵の消息を伺ひる所に鄭成達諸将を集めて評議しるいん此
中の戦ひ必ず我に利あり家兄芝龍南京に在の北夷唐紀
とふい数里隔し敵船を焼き甚利あり我計策を用ひて敵を驚か
せんとそふいふ所に監軍函輝ゝく出くゝ中るい中に対て
も某一つの計あり今十月の末なれば北風烈しく小京の兵
を乗る船しむべし今江中の樵夫を雇ひ薪の中に薬を塗
備を弱しく敵船を焼しめば敵の兵士ろこんで是を賞じそのち
彼虜ろ中の紀る所月所に喚月出を待うけて夫討るべ一挙み
敵軍を折衝せば鄭成達計きわめて妙とゝく函輝の命じく
彩じ函輝彼虜奏の樵夫ゝの金銀を与へ虜毎に







鄭鴻逵用
噴筒火箭
燒清軍



姜氏が計を中會して欽私を其翌日十月廿八日彼樵
まくも幽輝が陣に来り一私の炭悉く欽の艀に奪ひ
幽輝是を見て大に怒び鄭海達と共に合戦の用意を
艀ると結居う去程に水軍いの刻に到り私軍水陣に庵と
に中國の兵ども小舟に乗て彼方に廻り腰と脳を撞
私の炭を奪私毎に方ち奪を防んと欲下黒山嵯峨の
りしが奪を気づいて欲都て是を時に及ぶ小中國の兵士炭を奪
奪ると見て大に笑ひ合て是を以て西に帰り後
欽に向ひ兵を見て中國の兵の弱さよと嘲り笑ひ唐紀龍是を
く雑人を書を懐ぶ小方を走て欲者楚の大将に亀ざる
美氏笑て水戦に大利を得ず陸に水寨を防ぐ良策



の為業なりとて士卒に命じて笑う炭を焼し私る小炭
乃中より怒硫黄焔硝桃蓮を人の臭を傳蓮帆に火を飛うつり
上下の士卒ひて士卒ひて方に火を防んと欲ひ方に三百余艘の私
毎に悪く火を出出光波に映し黒煙天を掩ふ鄭海達の大小乃
艦船を議南の岸に拉るが欽私に火乃先爆こと三度しばと
中幽輝が計を的当せり進めくと下知に教百の焼私を
押出せば杉ふ金山乃小炭嵐頻りに吹物ろせが南窓帆義を
掛矢と対るごく小の岸に押よせ亀て用意せ喫驚火箭を用上
り鑑賞打敗せば火勢乃拡中急雨のごく小寨の無陣急火中
に流こるの悪しるを敗ひりを庵小軍の大将唐紀龍下黒山嵯
物名味方を下知水陣に懸伏に諸軍焼私に奈移り本寨の軍

清盛丁黒山渡
波上戦鄭芝豹

諸〻もろ〻の工匠計引退き手船を焼るもの〻夜明るを厳く
掛て敵兵を打散さんと自小船を乗て諸方乃〻指揮とな
雖ども〻大船数百艘に星命りも退けり南軍の大将鄭芝豹敵
船近く船を押寄せ水寨の門とつゝまし小焼をらんと本陣乃船
を間諜史勢及ひ再船を進ませ史業を迎んとしるを知に〻よりの〻く
と敵の明海り数小船乃下黒山い遥に鄭芝豹ご船と見るもりなき地乃
らして討ゆ〻と法軍百余艘乃船を並べく押寄れた鄭彩函
輝光と見るく芝豹討せくい叫ふまじと自く数百乃軍船と押並べ
対〻と揃てさんぐ〻に対るもぐに両方の船ふまじ金鼓の音波
〻動じ矢呼びの声風〻まぐり小船乃下黒山い猛勇並びなきもの
なれば一騎乃手乃換敵を求めしかさ〻両兵〻渡義と名付





船より乗り出り水上を分るの手地のごく芝豹と見げ討く
るれば芝豹ご船山は逆櫓をを対〻とるべて両のごく矢を放
ち次ぎ〻ご引を〻び唐紀龍も下黒山ぶりやまらみんの〻と恐
ま陣と呼らして軍と法ら自ら小船と進め乗り下黒山と接来
敵の向い毒箭と対さ〻せるる小船も渡両さらくと漕りきう
西軍ども船と引まけ乗日乃軍に出くゝ〻り

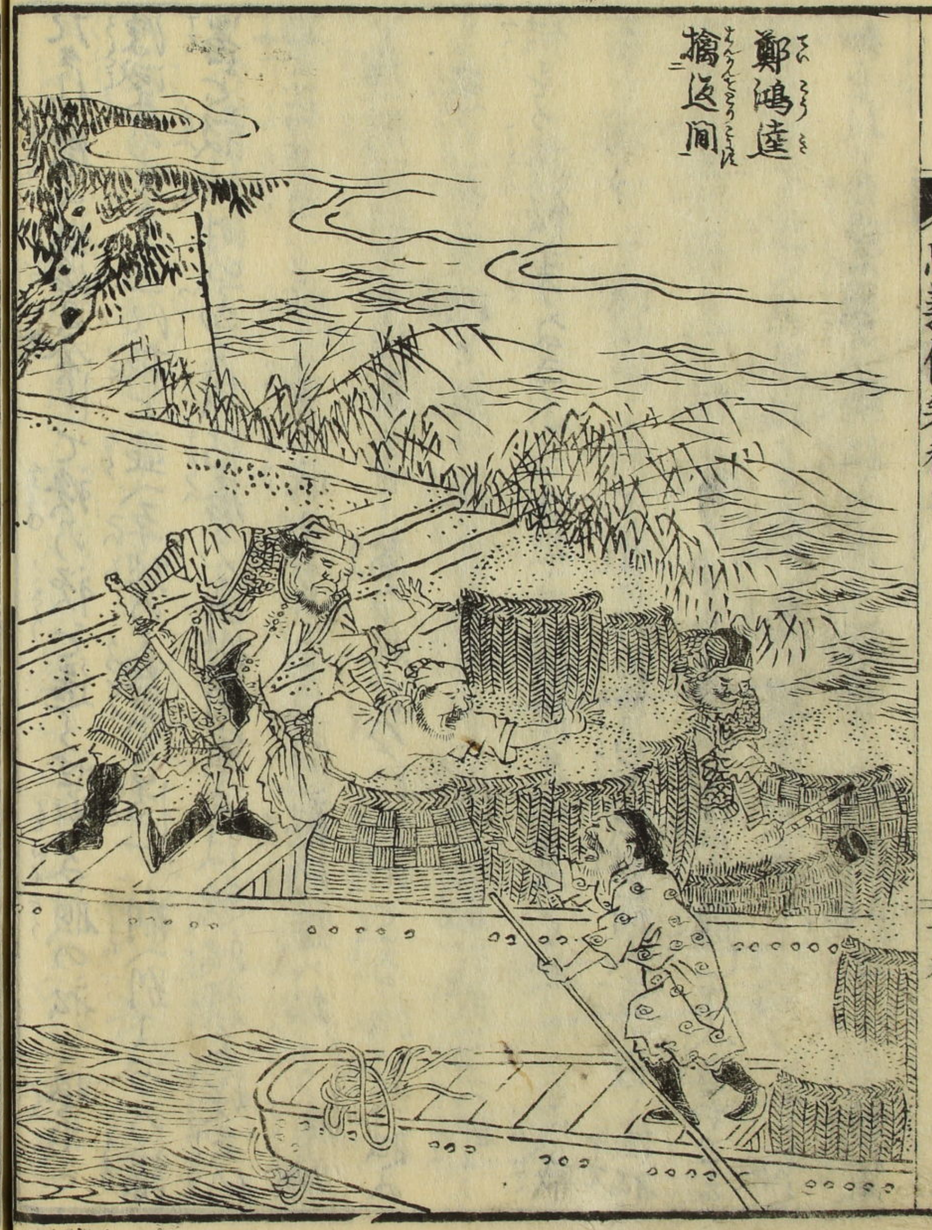
天妃得感鳴逢摘返間

枫も小軍乃大将軍唐紀龍ハ函輝が計ゆ中まそ門の水寨一
附ゆ焼拂いを大〻恐を朝暮乃毒箭にも毒薬を塗らし
と結ひ十万の軍兵兵粥と養て飢を苦ひぬ下黒山中けゆ
敵乃大将鄭海逆が軍令と考る小原海賊の後るれが水戦さ

天妃
有應

て御とも得られ陸地へ押びきよせんとは雑賀を沿として退くよ
同じ味方もどろく山中より寨を引入れ三三ヶ月も屯るとこの時遠が
軍中様子く戦ひを忘れ妻孥ばかり一挙より擒よとし唐紀
龍秋をふまく我苟も勅命を奉り南征の向ひ僅より一戦の級より
悔きうん若葉寨を退くなりやや今既より味方の和率はこの進退
より訓誣引の自在と得ざり況やや今十月の末に当つ東南の風吹
ゆ已に歓ひ尖妻を再びとも却て己が私船を焼のこかりうん何の
恐るゆみんとて予より引なれ公自諸軍皆是を聞てまさに此論
天の利より叶ひ地の理より也も應じそうと日より是より陸ひ要固より水陣
と守ゆそろ唐紀龍いく小比しく歓寨をお破んと稜く計を
立まるが急角小國の兵士水上の戦ひより孤に十分の勇気出が

たれば俄より振活より命じて筏乃筏を造らせ数より艘の私を繋さ
浮梁のごとくよに板と並べ平地乃合戦より為に制へ別より一乃謀
書と設け附の如く私結居るに附南軍より歓私数多焼失ひ
ゆ士皆英気と益に勇を悦べゆうきり以鄭絡遠へ幼より南海
と横行に私中と往来せ者ゆれば為に天妃と云に兵に私より
も悪く薩摩と設け海藻と薦めて祭りと為に或日天妃乃
供ゆる搏飯事ゆきて小二つより祝ゆう絡遠先と人く時ゆ戒
ちく諸ゆを時む附より門と守ゆる大ゆ曹岩孩鈍両人若て曰く塩私
十余渡溪奥より入く塩を販くゆを請門と開き通ゆべきやと云
絡遠先と云て其塩私こて験に先一艘を引入ゆく強換せよと下
知とれば曹岩孩ゆ塩私を近く拒きやゆるに附陣中元来塩乏


鄭鴻逵
擒返間

價を論ぜんに、私の塩を先に陣中へ買えば塩賣ども
多い我後十余艘の塩私門郷より出し賣を為ん其外私
の買塩に後れて余の私くも甚だ恨み申ども希くハ十余艘
の私より一艘の塩をもらひて買後れ申ども曹若弥
陸きすに乞ひ求らば海を渡る軍の中陣より外て無に甚多と雖
ども多俵ひく中陣より塩商人多何の心もなく漕い三て中
陣より多り出間より義彭自塞外より出数十艘の塩私と成見
る小ふに塩とうづ多く積て私庵に西洋絶及び数百斤の大藥
鉄炮火器を鞍馬隈へ入う急ぎ此中に小者ひとし鄭成
達大ふ結び先ふ天妃の感ふ保てう教凶ふみんと成神霊ま
ちに多るむ庵ひく彼塩賣を悪く切殺ひ数艘の塩のうに成
奪ひ今宵うに成歌私考来る庵ひ用意と為て藤金ふせよや
とく芝豹鄭彭曹若義彭ふ門を守らせ路遠自ら七条の
道兵を解ひ数百私の鬼私ふ多義彭大筆とひしくと擒へ歌乃
考ふる私結りけう國輝い別ふ三万余人の兵と成ひ二十里計
上流の黄霧湾とつへる曲ふる潮ふ埋伏ひ先も和國を絶て討
出んとぞ図りける

續本國姓爺忠義傳初篇卷之九終

繪本國姓爺忠義傳前篇卷之十　目錄

第一回

鄭鴻逵廉貴小軍

鄭芝豹占丁黑山戰于揚江之圖

祁鳳霞小兵艇船之圖

第二回

西小西軍討南京

南京弘光帝召元兒之圖

尤良玉戰白鷺灘

尤良玉白鷺灘調水軍之圖

尤美康斬方國安之圖

第三回

第八回

第九回

鄭芝龍說危良玉

鄭芝龍來水寨之圖

鄭芝龍列危良玉陣之圖

史可法集兵糧

明史可法於張江城拒清軍之圖

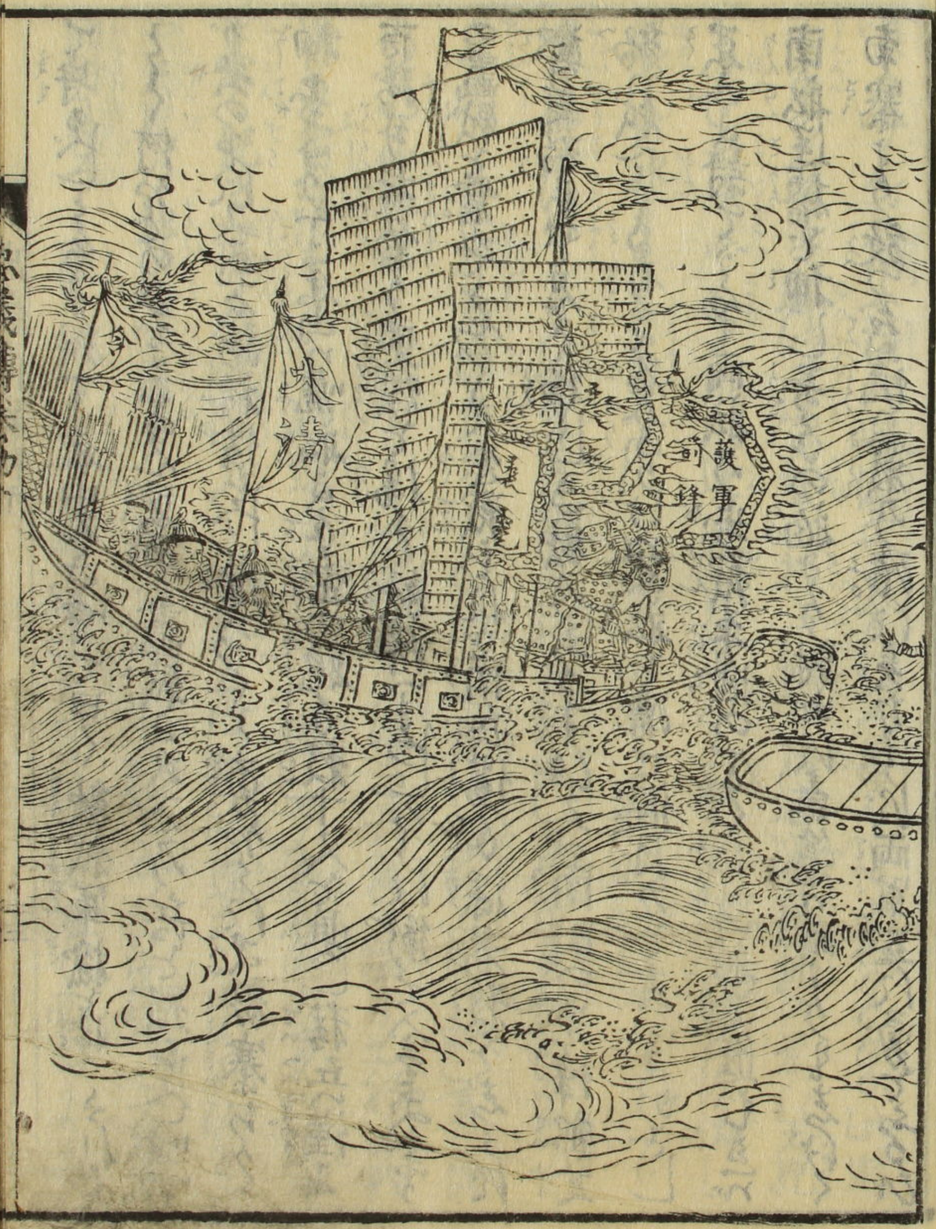
湯餘慶計勦清軍之圖

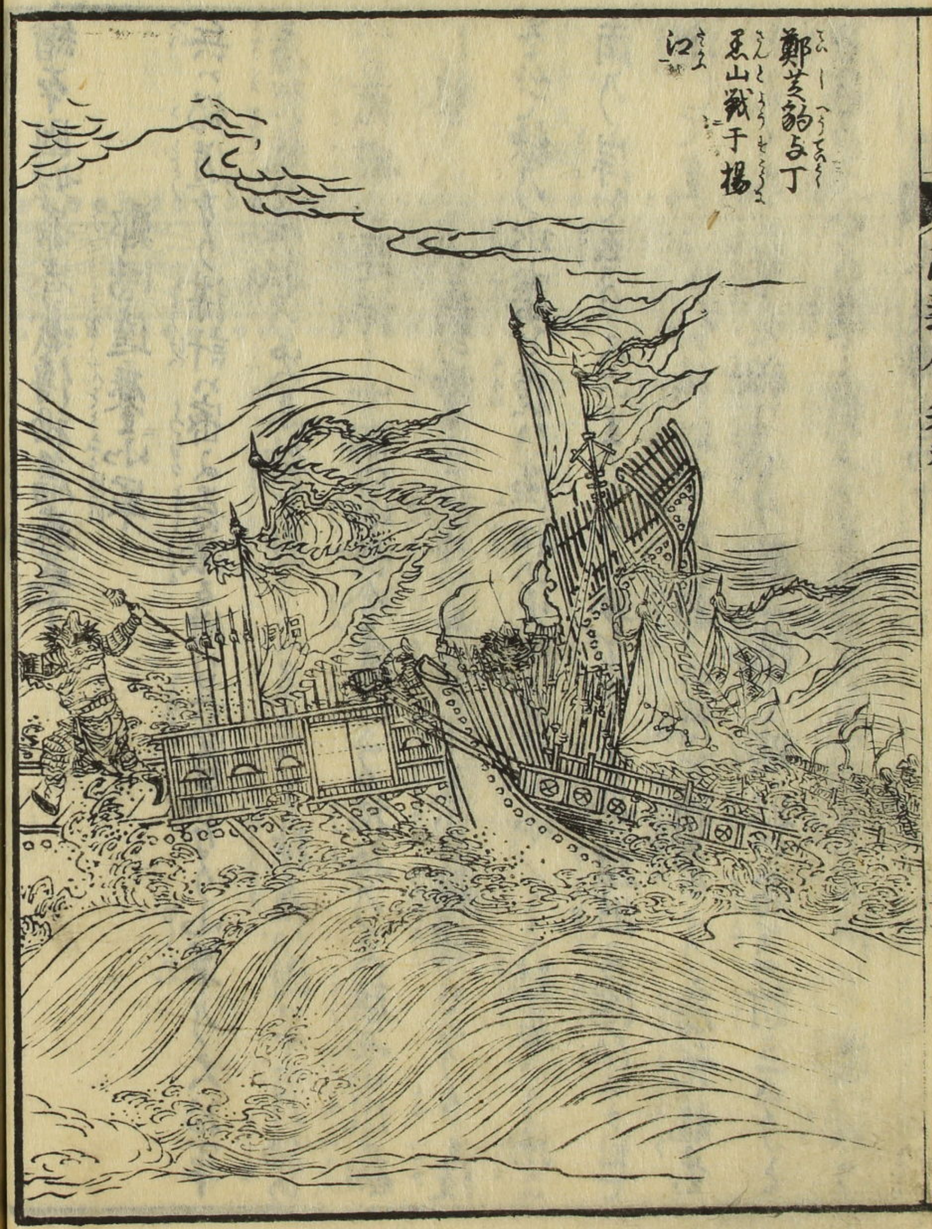


# 繪本國姓爺忠義傳初篇卷之十

## 鄭成功遣饗之小軍

兵に偽道なり謀計に密なる所に其言実なり小軍乃大将軍唐紀龍に告げ私の史業敵と欺くなる迄と独去び所に十一月初の八日我朝の連船一十万の小兵令書して招撫乃大旗西の風に翻し繫くたる食敵の郷きき水沢と号る丁恵山に樓櫓を立て敵の水寨と覗ひ告げ私の史の名代今やくと結居さり統を南の岸と去り又六里ばかりを小船一艘波を漕ひさり同と凝して見と見れば告げ私の上に教ケの首と斬条さり唐紀龍見と見んと大に驚き告げ私に謀斗敵を懲く告げ私の者を斬さりと見るで今に進こ戦ふも味方乃勝利来る[illegible]を寨に帰り


護軍
司鋒


鄭芝豹与丁
恵山戦于揚
江

て守るべしと云る紙丁黒山大き呼て曰く欽弑軍撞と唱へ[illegible]
[illegible]何ぞの男子黒山の畫紙又一方の兵と数しべ達喇
が爰のごとく又百誇衒伏べし進ろ〳〵と勇ぐ〳〵又欽寨ら〳〵
押寄つゝ丁黒山い曉船又鼠の如く数十人と奥し精兵僅又
百誇斗歩寄り黒煙と揚く欽陣へもどろに衝て入ると金寄
の畫紙と震そえぐ〳〵悪戦とれば南兵傷又深若数を走るべ
鄭芝豹芝と見て物〳〵しき欽のふるまひ又南岡の先鋒鄭芝
豹い戦と為夢又名祭うけ案船と漕せ偃月刀と為向よかざし
黒ゝ又討て〳〵中両船の歩戦平地のごく小船船と進む互ひ
南船逞擣と押し寄るの船より射出し毒箭い雨ゝ降もちげく
南寨より放つる流い雨数の強ゝ吹ゝ来ると雖ども両軍互に勇とふる

嗔き呼んで戦ふ沒に勝敗又分ざるる弟ともに久ざりける叶附
南軍の大将軍鄭昭逞い髮と振き振と擣き菩薩船の船に王妃
を逐ひ吾軍今正に風に逆ふ吾船進んと欲とれども能ざ伏し
船ゝ神ゝ東南の風を祈ゝ叶軍又利ならしめたまで
他日揚子江中又天妃廟菩薩の祠を創造し永く毒秋の祭りと
為るべゝ此神若感應なくんば逞忽水底に沒を投ぜ菩薩
の祠ふ怒歎とぬべと〳〵紙巫酒を流ぎ丹漿と凝して祈けば
祠又不思議なる逞が一急神に通じ忽西南の方又一塊の
黒雲起り一陣の暴風さつと吹来れば鄭昭逞大ようろこびと
や天妃の神風吹来るぞや進ろ〳〵と知と為せば南軍七万余人
同祠又ろと岡と仰り一面又船と推出し風い猛く西南より吹

狂風覆小兵
護船

志士たちが小軍の艦船からひっぱり出して英雄灣を拠へる
函輝が三万の軍兵王風を先鋒と為て
と見て義後を敵と為て叫び引退んと制する所に北風荒
く吹来り白波を巻き上て船を掩ふ元来小軍の艦船い狭の浜とん
で繋ぎたれば延引もせず自ゆる〳〵義後の南軍はしくと五圍
浜地と為べき所なる小軍暴風を逆ひ大海を乗り出し義後
を看る〳〵遠なく水烟肌を透うと氷と〳〵と変離し
矢砲を討て命を落す者数知れず函輝兵士を捨て風を分
矢篠を放つ電の閃くごとく忽大小の帆を揺り倒せて
燃さしめ下北軍士防ぎ戦ふ能はず函輝を乗せ兵船を棄
んと救ふ艇り搖を立推切んとせしに山のごとく大海小軍

の船と打除ると見へるが表むき唐紀龍嘘嘶の両大将十万の軍
兵諸もろを伺のみ為を流を急牧亀の後を慕ひ丁来ふい曉
船を奪て戦ひ叫びけりさまを見て大の驚き紀今いるるいじと
急を小軍を船を奪ふ余人の残兵を集め立只もうく小亦
さして敗小人鄭啓達い小軍を悪く打滅し凱歌を唱へ兵船を
泉州へ返し計青南朝へ所へさし弘光帝御感紙をつび鄭啓達
と清南伯を対じ浮ひ其の余ね率ひ奪く恩賞と揚ひ除朝廷のる
獲を与へ〳〵と沿へ〳〵たまへい鄭家乃一族僅で令義恩
と謝〳〵て退きぬ

## 西小両軍討南亦

鄭啓達小亦乃大軍と揚る所を廃し（る）後い南亦の弘光帝

南京弘光帝
召乞児

ずゝ小公と後ろ指ひいつゝ女樂を献ず酒を荒こと夷のごとく民男女を
羅患[illegible]英毒としつゝ乞四方に[illegible]ども宮中に居ると雖ども[illegible]
乃政い悪く馬士英阮大鋮劉良佐ら[illegible]侯安乃徒心の侯を献ず
天落の魏忠賢小り牧勝ちうさしが迴後て忠義を勇む清臣い
悪く宦と捨て四望を退き朝廷い唯晴夜のごくたのしげ乃紀綱
乱れ乃義を先帝の忠臣左良玉呂三桂ら[illegible]張献忠と賊して後
心ずゝ[illegible]清朝の指揮を順ひ西安侯小対せらる山西と落ちあるが
南京乃弘光帝帰後の志ありて鄭芝龍名ゝ事と後を[illegible]
ゆへ[illegible]大ようろこび自ら臣と称し教度小軍と破るべき計策を
熟ぐ[illegible]れど姦臣馬士英名ゝ[illegible]と拒く事堅て先ず侯て左良玉
大ようりと疏して奏しるい若明朝の帰後と図んと欲ず[illegible]



[illegible]と率て侯を退け民と[illegible]仁とるゝ[illegible]今の羅患馬士英
阮大鋮劉良佐ら[illegible]侯乃徒[illegible]民の[illegible]を[illegible]言
を納ず[illegible]馬士英ら[illegible]朝政と乱さば[illegible]天下乃[illegible]小義兵と揚げ
逆賊と敵し別ゝ若と建く小弟と称し先帝の御志と[illegible]民乃
塗炭を救ふ臣とて奏しるゝ[illegible]弘光帝馬士英名ゝ[illegible]
[illegible]ひるゝや又い酒色に荒こ事と怠り[illegible]ん[illegible]を侯ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ侯て左良玉南京乃城[illegible]と[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]の輝きゝ[illegible]の流ゝ[illegible]南ゝ[illegible]白[illegible]瀬と[illegible]水
寨と[illegible]南軍と引入一戦ゝ[illegible]頗忠之南京乃
朝廷大ゝ驚き馬士英名ゝ[illegible]て英得功と都督大ゝ軍と[illegible]方
圍安と[illegible]兵ゝ軍ゝ[illegible]八方の軍勢と率ひて左良玉ゝ討ゝ[illegible]

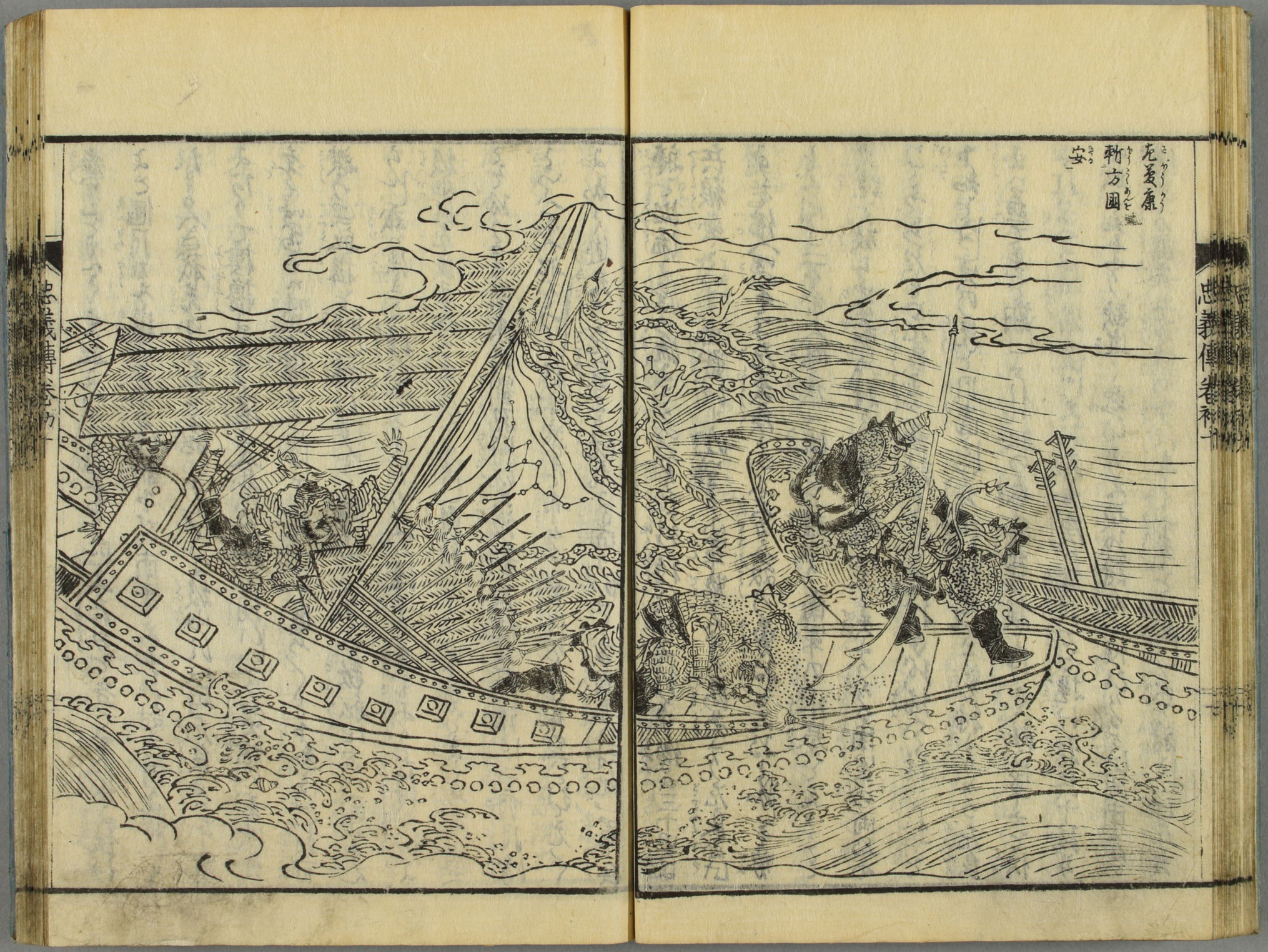
明尼良玉
白鷺ヶ灘
調水軍

小赤ようり再び隊王と大ねしを勝三千余人を徐州陽州と除て南
赤に到るは頻る風波に南赤城の強勢大なるゆえに史可法朝に
出て奏しるる左良玉が兵急なるゆえに思うくに思ひ出軍
一さび表表くに南赤の患ひ是よりも大なるいえ弘光帝の曰く諸
方の急と告るの甚切なり卿よく是と謀て左良玉急なるゆえに左良
玉が討小兵急なるゆえに兵と防ぎ海が亂欲を奏とると後に宮の
史可法大きく小敗き者の可何で容易なるゆえ亂欲と唱て者の
見んの是赤に是と流と流と軍兵十万と引率し揚州の城を
敗き者に

左良玉戰白鷺灘

出征の黄得功方國安の両ねい八万の軍勝と編し敗るの船

船と流と流のさうのぞりて紛紜たるの俄の三十里の
兵糧無きいまゆえ戰いても及ばざるの小軍勝大きい落矢ようり左良玉が
の者を他人ゆえを左義庚とつ大方の勇ねと大ねと陸を勝
とゆえ二万余人陽夜と流と推ようり南軍の水寨と充ることを
火炮と放ち火箭が射ようり嘆き叫んゆえ黄ようる南軍の両ねあ
いてるるとを左良玉が夜討とるゆえ兵が使へく射しれやと
ゆえ知とは火の光と日出と是落ゆえ結んゆえを射ようる左良
玉が面て是と朝しれが私の表と藉と上げを陸の軍士と休
しれゆえ傷者は左義庚が徳川刀と挑げ雑兵十騎斗
小船と乗り欲近く思びよう大ねが討んと何ひるゆえ叶南赤の
総兵二万國安五万旗の下に立く士卒と下知矢と射しむ左義

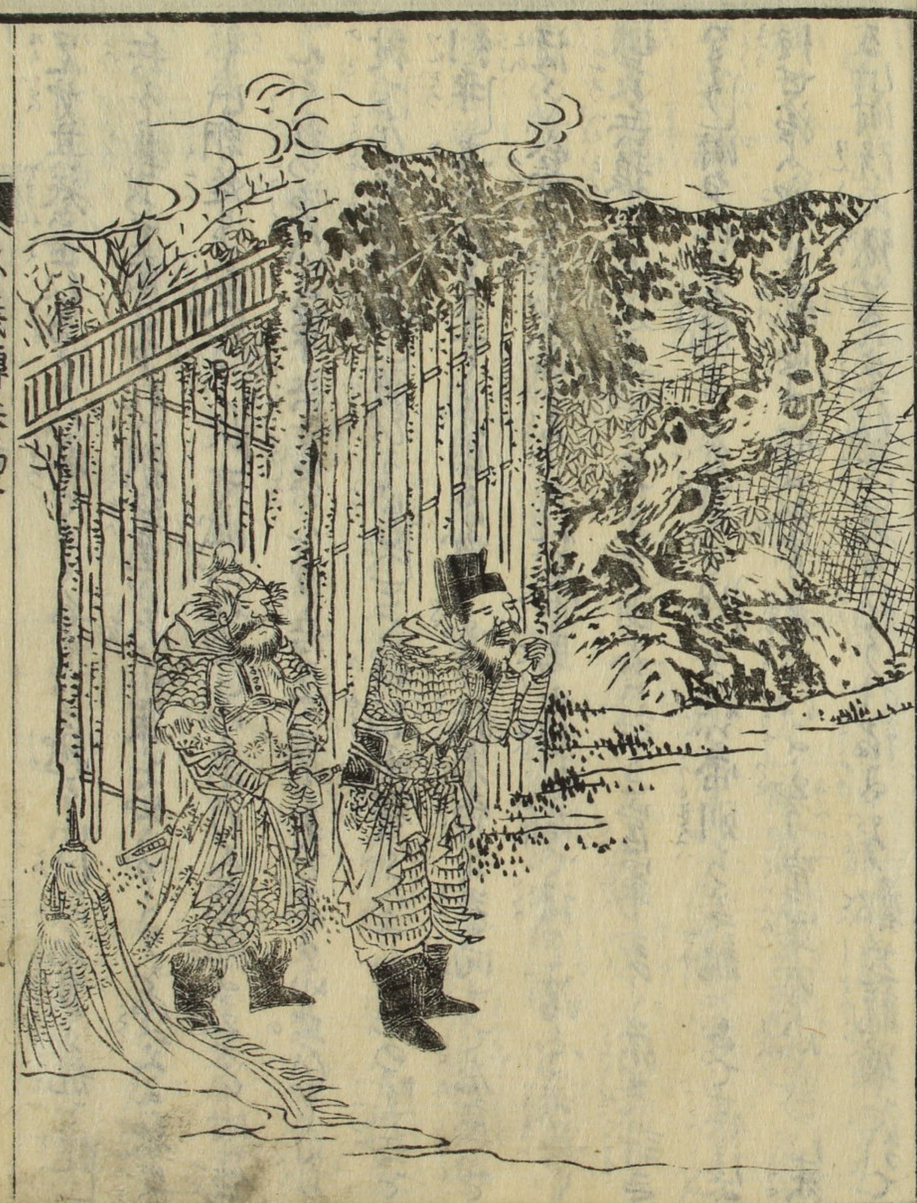

花夏康
勅方圓
安

廣芝と云へる者を私よつて龍爪の匹夫と為て英衆を駆け
よと偃月刀を揚て呂一刀に新下せば南軍大勝討と何ぞ断し
なるべき我先ぶと私と戦しさんぐるに後少に付て左良玉が寨
よりて樓櫓よりて遥に合戦乃神と何に石火砲の毒煙発
きく味方の味方勝よ帰りしと学ゆるぞ進ろくとも知とも敵百
渡乃ぞ私撞と呼し撞にりんぐ撞と也と敵数私に方八面にさん
らん武の流さと陸に逃るもけりつ人陸ぞ敵
級小に左良玉大に義廣と出し凱歌とて軍勝ともしかも寨
こそ陸りる南京の劉孔昭流大流劉良佐等後陣として明月湾
とつふ布へ私をつ孫水寨を布るる英得功が右誘斗の兵とてえぐ
よ知く逆来り左良玉が流乱に出りぬく方国安討死し軍兵

悉く溺死から上て逃さうと云諸郷芝と云く大に移るき敵いふて
合戦を儲し左良玉と退くぶ左と評議きまぐ知りるる小流大
流やるる左来芝等の敵を破んと思郷芝龍に如若に抗ぐ敵も
芝龍馬士英と陸はしりしぶ出に忌退んぐに芝に左良
玉と小京の西寇等くるるとつぐも郷芝龍も兵と出さぶ朝廷よも
に芝龍と石に乃に今左良玉が勢ひと乃る小郷芝龍ちぐ斬静
もべき若に我伝て沿りと伝り急に郷芝龍と出て招き一拳に
大功を私さんいふ小手に伝諸郷芝に付に
伝り南国の安平撃へ出ぐ

## 鄭芝龍説左良玉

安南伯鄭芝龍い其弟鄭鴻逵揚る江の大功に沿り安南伯の封と受

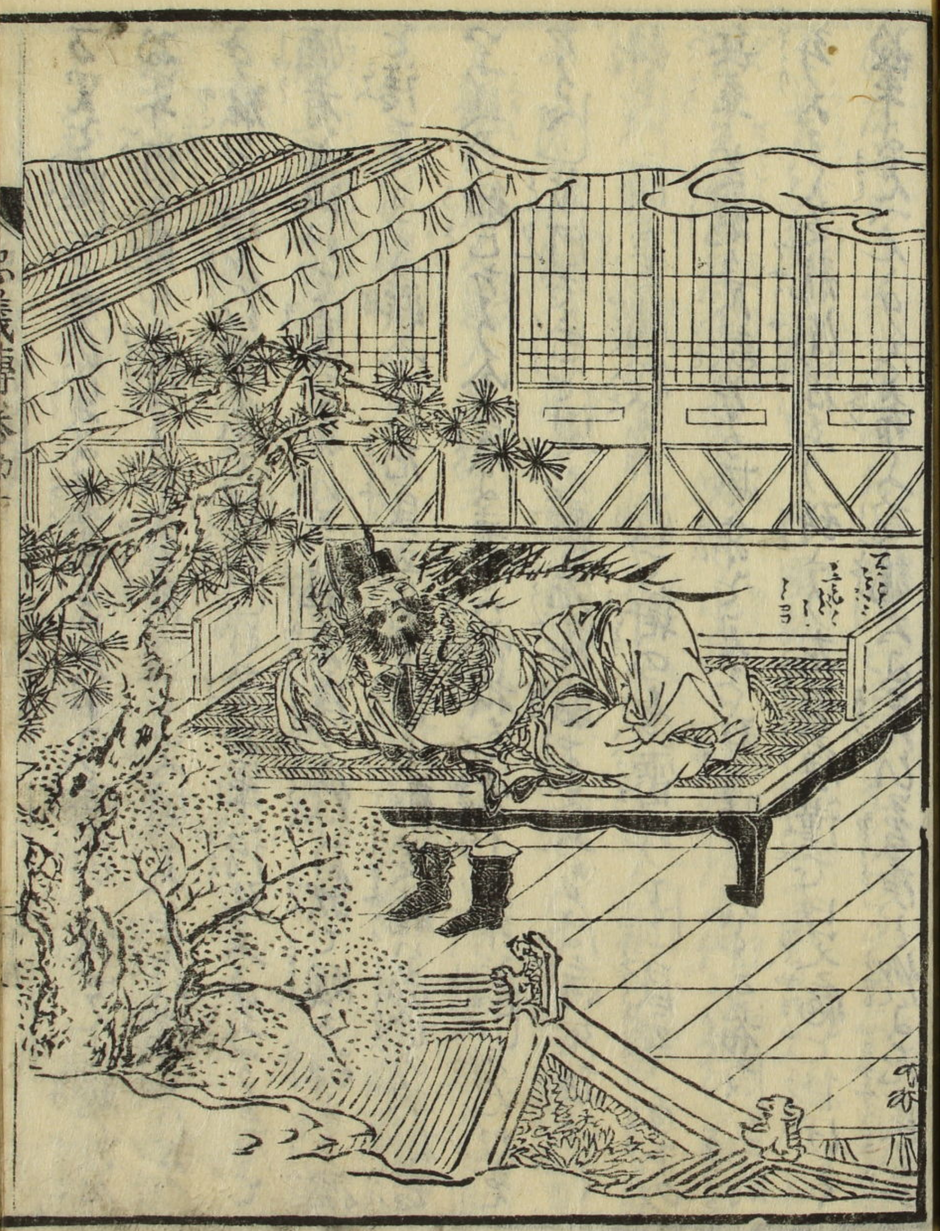


鄭芝龍
李水寨

兄文其義世にるく人挙てうゝ母ゝろる拠る小はに左良玉孔と配し
兵を集めて南京のれい朝廷光ぐるる小軍と出さるゝゆと宮の大ゝ欲無
〜はに朝廷もゝ民ゝうゝ〜びて滅びぬ臣小京の大敵脱ゝるの附ゝ策
んぐ私の弟ひゝ軍兵と共ゝんゝゆ吾居ゝぐゝ光とゝんゝる小出びど自ら
徙て左良玉ゆ孫〜戦ひを出びて猟ゝ函輝とゝゝ余話の道兵と
小率〜安平城を立ゝく光南京城ゝゝゝり弘光帝ゝ姜同〜て左良玉を
法ゝく合戦をはむべきゝゆゝれい帝馬士英と石て議ゝ法ゝゝ士英も
はに兵粮の運送ゝ脳ゝ甚ゝ方困安い討ゝ官軍多ゝく為英討き
はゝゝ附ゝれい芝龍ゆゆ方左ゝと〜ゝれい帝則ち芝龍と石て其法ゝ
但せ法ゝ鄭芝龍出ゝ私ゝ弟ゝ来石ゝゝり官軍の水寨に来
るはに附院大後名い光に老〜ゝる偽り礼沿ゝゝ鄭芝龍軍と引て



来ゝるくゝひ大ゝ芝ひ附〜て曰く帝光ゝ沿を揚ゝゝゝ拠ゝ軍労を
辞せびて寄ゝゝる出ゝ天兵の強ゝるゝゝと水寨ゝ来稼臣ゝく左良
玉が軍威ゝ辞ゝる拠ゝ力と図〜ゝ功を達ゝゝ其名万世ゝるゝくゝん
鄭芝龍光と出ゝく郷名何と言ゝく獻をとゝんや某家ゝ来ゝゝ
帝の勅命と受ゝく接ひをゝんゝゝ朝廷の左居沿りと偽ゝい
鎮忠臣に神ゝゝり郷名もゝ忠実ゝゝゝるゝんゝとゝる孔左良玉ゝ
光朝ゝ功居渡ゝ光と光附せんや芝龍今朝廷ゝ法ゝて利害
と流ゝく渠と家ゝ軍戦をゝんゝゝ旁懐ゝ法ゝゝゝれそ函
輝名の兵を私ゝ附〜十騎升ゝて来石ゝゝ左良玉が寨ゝゝゝり
名ゝ通じゝく渇とゝゝ附左良玉傷ゝゝと病て寨中の郎ゝを
子左義庚出ゝく光と向ゝ廣を礼沿ゝ空ゝゝく芝龍中ゝるい某



鄭芝龍到
左良玉陣

万里を遠しとせず家を棄てゝ天下の安危を後せんと欲し危
拙軍何ぞ自ら見へざるや袁庚が曰く又はこゝに来て傷られ
ゝ紙つゞけ山左に見えて歓待しむ老拙軍酒肴を設けて宴を張り芝龍袁庚と俱に飲て頗る辞しう拙
と清てうまく腹へう左良玉芝龍に鄭芝龍に当世の英雄若
いふ〳〵如已なり今家を棄てゝ軍を心しめんに先
なるべし我何ぞ先と遠ん鄭老翁眠すさめるば病に接けく
辞じべ海の芝龍が曰く腹て鼾の雷のごとし良玉が麾下の
兵卒芝龍が厚歓なる振舞を見んく弱る嘆せんと云者又二時
斗みゝく芝龍潔祓ふう礙うう左袁庚潼で曰又病と接けく
拙軍の見へんゝを希ふ芝龍大に喜び袁庚と俱に左良玉が

病床に至り坐より先朝の事を説き涙を流して且悲
と且喜び鄭芝龍が曰く今国勢大清の兵に当る南京の拙
軍に先朝の恩義を慣へく小兵を付るゝ何ぞ私の家を
以て獨牛の戦ひを如しや馬士英等の姦人朝に蔓るゝ日
ゝ〳〵て滅ぶべ馬氏等が害ふ清国の英い大なり大なり細潼
を顧ば先大患乃心歓を已て後心を合せく後後の姦人と退
くゝ何の難きゝ先ゝ左良玉両眼より涙落るゝ豫のごし
若が言甚若拙ども弘光帝は懦後の君にて〳〵別の道を達
て来と図るべ我今病重く死せんゝ且〳〵ありよろしく国の
ゝ患と憂へとゝくゝを袁庚に命じて鄭芝龍を辞せ
しも我死せば又のごく教ひ使へよ鄭拙軍もゝのごく恵を強ひ

明史可法
於揚州城
拒清軍

く至後いよ〳〵病急に迫り言葉つゞ義庚欲きうるに藥石
効進むしるし其弱なく遂に病篤に死し鄭芝龍い義庚が
喪を拔けて暫く泉州に滯留せり

史可法棄兵糧

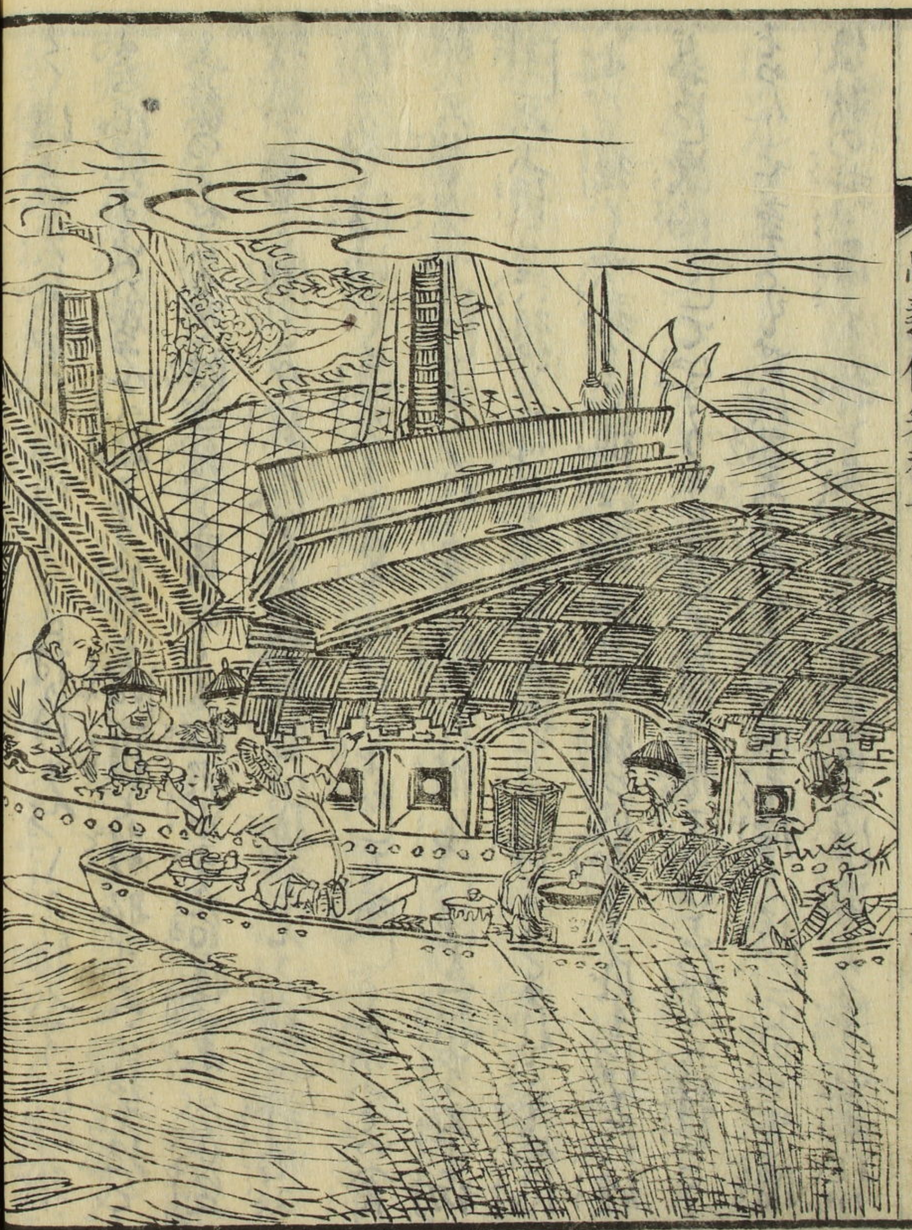
此時大清の豫王い安大人吾金玉等の強勢と俗に其兵二十余萬
人小東と號し毫四より淮海を渡る小詰清の德に服し敬て
安〳〵樂の兵を以て順治二年正月廿二日揚州に到り史可法が籠り
る城を圍んで抑城を陷るい揚州の南に有て東
も常州府の界に接し東西七十又里に〳〵淮江に臨み西い應
天府の句容縣に境し北十又里解鹿嶺に至て水軍流る
宛に南中要衝の地なり南京の史可法を拔き三万余騎にて

城に籠りて清の大軍向ふと雖ども馬と弛く援兵と求ると
ども南京に入て〳〵大軍兵民しきに左良玉を防んとの大軍に
向ひ揚州に救ふ兵なく淮海の〳〵數日と經るでう
そうの中に史可法い麾下の大將陳貫蘭張郃等を
方轉元都等の諸將を集め議して曰く清の大軍揚州に
地に入るとも猶ほ兵と進むべ諸縣を拔しく落しうんに
因て城中兵糧尽きと知るに及ぶ戰つゞ〳〵て味方の飢る
を待と雖ども味方計と定り海上に浮きて敵の兵糧と棄
ちゝ味方に得ざるに敵に接ず永く籠城して如何ば敵
自ら勞るべ諸將皆此計略に同じ只張貫蘭強に戰を欲して私
と燒んと其用意を察して敵史可法擒に及ぶと天文と為る

よ小子の先ず張飛として張翼の勢揺とる所なる所以其後太
風みんを去り陳雄賀蘭両船と湯餅賣賈人の出でさせ二艘
乃船を能手一人づつ乘せ船を漕ぎ出でて船を漕ぎ出
船を漕出し以後洪朝の糧米運漕役羅國輝とて若干艘乃
糧船と隊伍を整へ帆を掛け風に乗じ順流の勢を以て
進ませ漕ませ来るく喝へ来る船を船水を滑面の憂と忘れんと
落く鼓と笑歌と酒と飲で良に〳〵賀蘭亟て酒の中へ毒汗
美味和さしば数百人の船頭ども酔倒して多く疾に流して云
つゝ船ども賀蘭陳雄等と共に〳〵葬亟べる蓬の如くとうけ和國
の大砲一度鳴うれば直ちに亟て刺客して居る右方韓元都及
び金陵の待ち伏せ数百艘の嘯船を繞へ上より周と撃ち矣のど

く漕ませ来る笑歌と雨のごく〳〵打ち注ぎ新入の山賊輩
よ来れ紀ず来い聖天の焼より信と花一揖と打ち船中大の騒乱と
ま歌のませるで防ぎ戦へと罵ると船水を皆疾来るを見
敵て勢さ働くの能ひば大和羅國輝は仲と見て歌の計略を
落るで防げ〳〵ほろ〳〵ひの兵に中を敗して敵〳〵戦ふとの人
歌い大樂況や防しるのれば賀蘭船に漕ぎ船中大事切
倒しるの役の兵糧と掠め奪ふ船と退けうとすれども西風
いよ〳〵強く吹来りて鎮江城へ流るゆる能ひば船ども破
と抜き深海として中ほどうる清の大和軍隊王はよりく兵糧とう
だられーと事ともせば安大人吾金王の両先鋒と成して曰く運漕
役歌の計の中ず掠と多ふとつ人の船の人の雇南より運び来れば

湯餅賣計
劫清軍



惡ともとる小ぶ〻び我國なる漢江の城兵三万ゆはるべうしぶを三分
か一いはとたゝかふ風の石小澤八氏處なる關を奥計の一軍
を漢江氏偏師妻夫人者て曰く王の計甚はしくたゝ弱鼠喰猫
とゝう城兵死を極りて我が味方の士卒撫元ゝ只後〻ことはと
及び城外と遠處に〻く靜の踏我が勢切〻城中自ら亂るを〻
豫王是を知りとして則妻夫人又一方を為とよへ兵以を撫くて行と
の兵八遣り吾金王八万余人を率ひ城の前に屯豫王自ら
七万の勢と後へを祥とゝくるふり樓に陣とを城中の奇策と
を伺ひる

繪本國姓爺忠義傳初編卷之十終



繪本國姓爺忠義傳第編卷之十一　目録

第一回　第二回　第三回

漢江落城
吾金王捕孫刈刈奇計之図
清豫王隔南京
孫江落城之図
弘光帝東駕篠峯川之図
唐王即位福州
婆童馮小猫紙詩乱恩之図
鄭成功獨國姓之図

第四回

國姓爺函輝名競力る図
隆武帝親征
隆武帝斬陳謙る図
鄭芝龍與國姓爺帰泉州る図
関帝霊佞臣を罰し図



繪本國姓爺忠義傳初篇卷之十

## 漢口落城

漢口の城中より兵卒を出し朱孩を捕へて金銀を奪くよへ偽名城中を守り今新城門を決てうけ叛逆人のこと呼び城中を騒がし事そのよい程まく恐愛をビ市の刑乃士卒金銀を奪く大の頼び許諾して退きける

呉金王豫め人馬を張拾し城中の裏と伺ひる事奏の刻斗

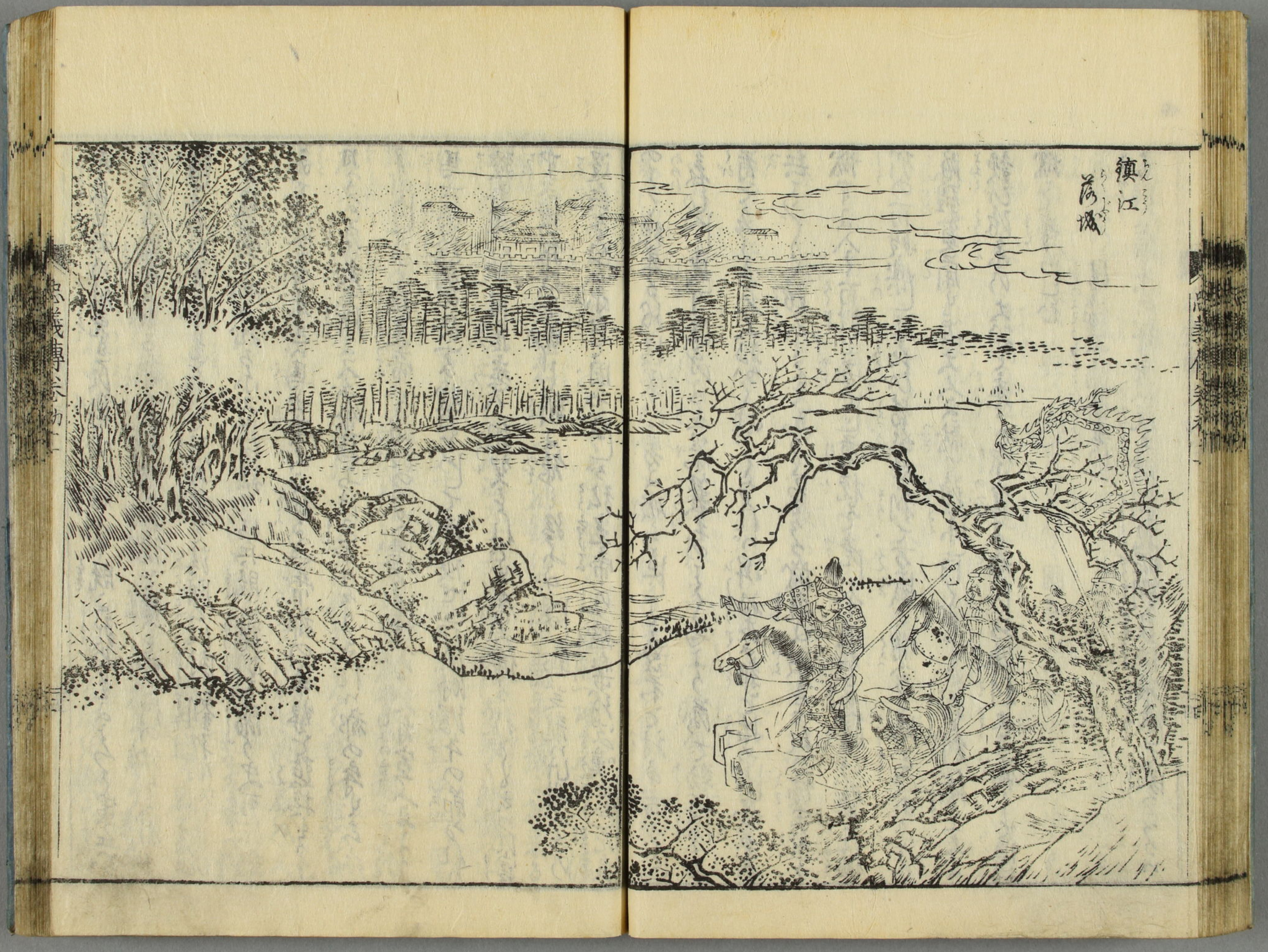
城の東門を決破り叛逆人よと唱ひる後に上下騒動もとるかぎり已史可法自ら城中を下知し兵ども歌を問答して史とうけうるうん呼りを静めて史と敵へやと罵ろ家に呉金王八万金銭周を纏て江面より責ろれば雑兵士卒ついて

吾金王
捕株刈
幻奇計

うつわき城門を開き南を脱ぎを捨て我先に出て張系に清乃大
軍雲のごとく龍をひき来るに城中に呉の王不能忠臣周章狼狽
物ゐ史可法大に怒り絶世に生れ国家の難に臨み死
と辞せんやと頭の冠を掃の袍と帯に玉帯をとるく捨て
に打ち乗り右に張郭尤に李郭乃勇ねあり鞭ならいつくまでも
て突入る馬を出せば清の先鋒呉金王玄豹の後援に虎の見掛の
甲を着勇武の猛ねあり数十人尤和後を擁て陣に馬を出
張郭よく張を左に右に張郭大に怒り槍を挙て突撃り
清の軍兵七八十騎突倒勇を震ふく戦へども終に多の勢の清軍
に包囲を新配をしてうち史可法に呉金王と勝負を決せん迫
来て懸張の中一方の囲を破り歌乃中軍を目がけ章狼
のごとく馳来る清軍に勇に破られ逃て毒矢を射る雨のごと
表しく史可法に三箭養毛のごとく馬より落て動後種に
首を落とる大ねかくれごとくなれば深ねを郭と始めて城中の
兵をごとく張人をあつまる城既に破るに張王自ら
城中に入て百姓を安んじ貢税を免し金銀を与へ膳けぬを揚
別の百姓楽しみ共び皆髪を剃て万歳と唱へる海とあり
陳雄賀蘭も安大人に就て張系に対て歌び張系の大ねを悉く原宮に居しめ海利王に属して漢江
城を守らしむ

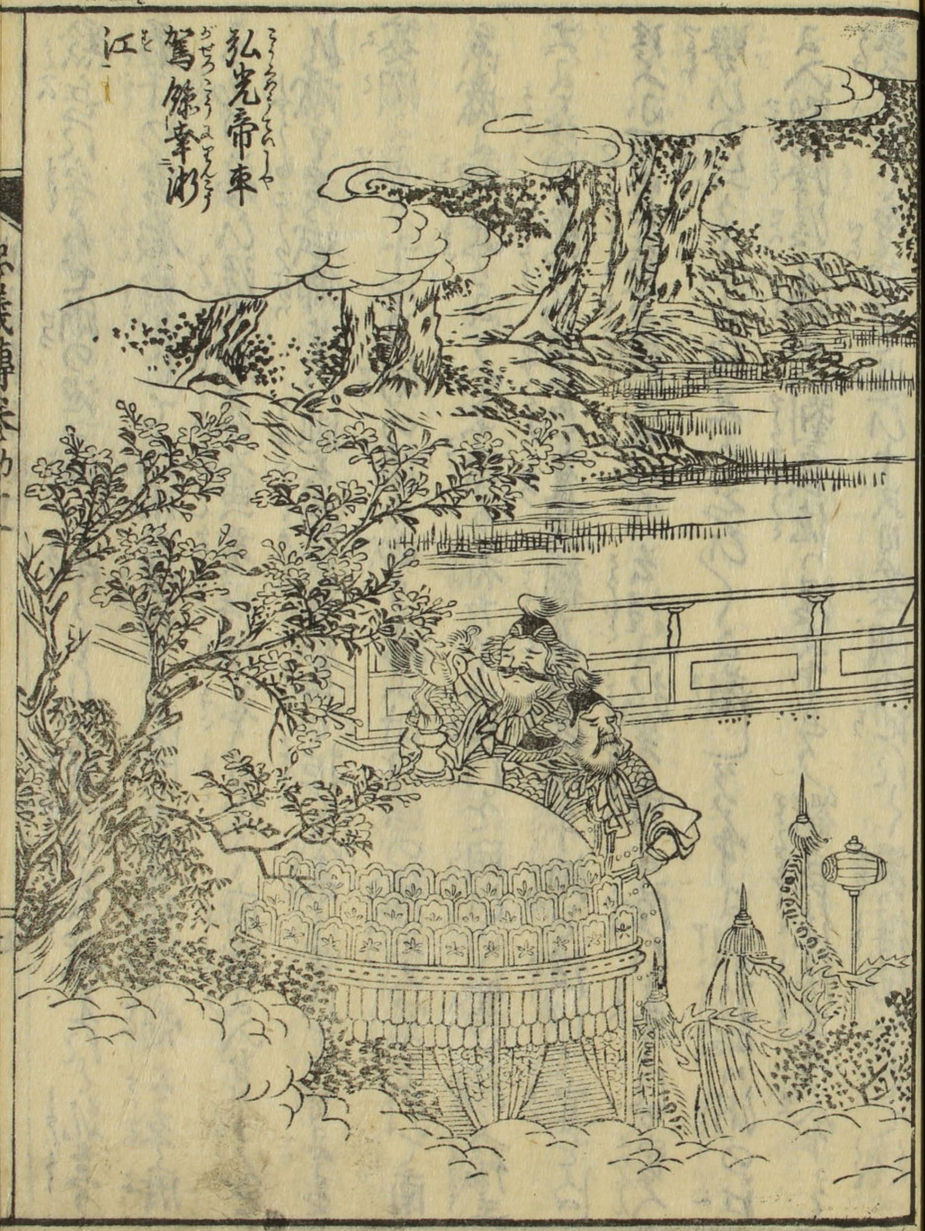
清豫王臨南京

玄祖に南京の都に皮院大学士劉孔昭劉良佐海系に対て奏

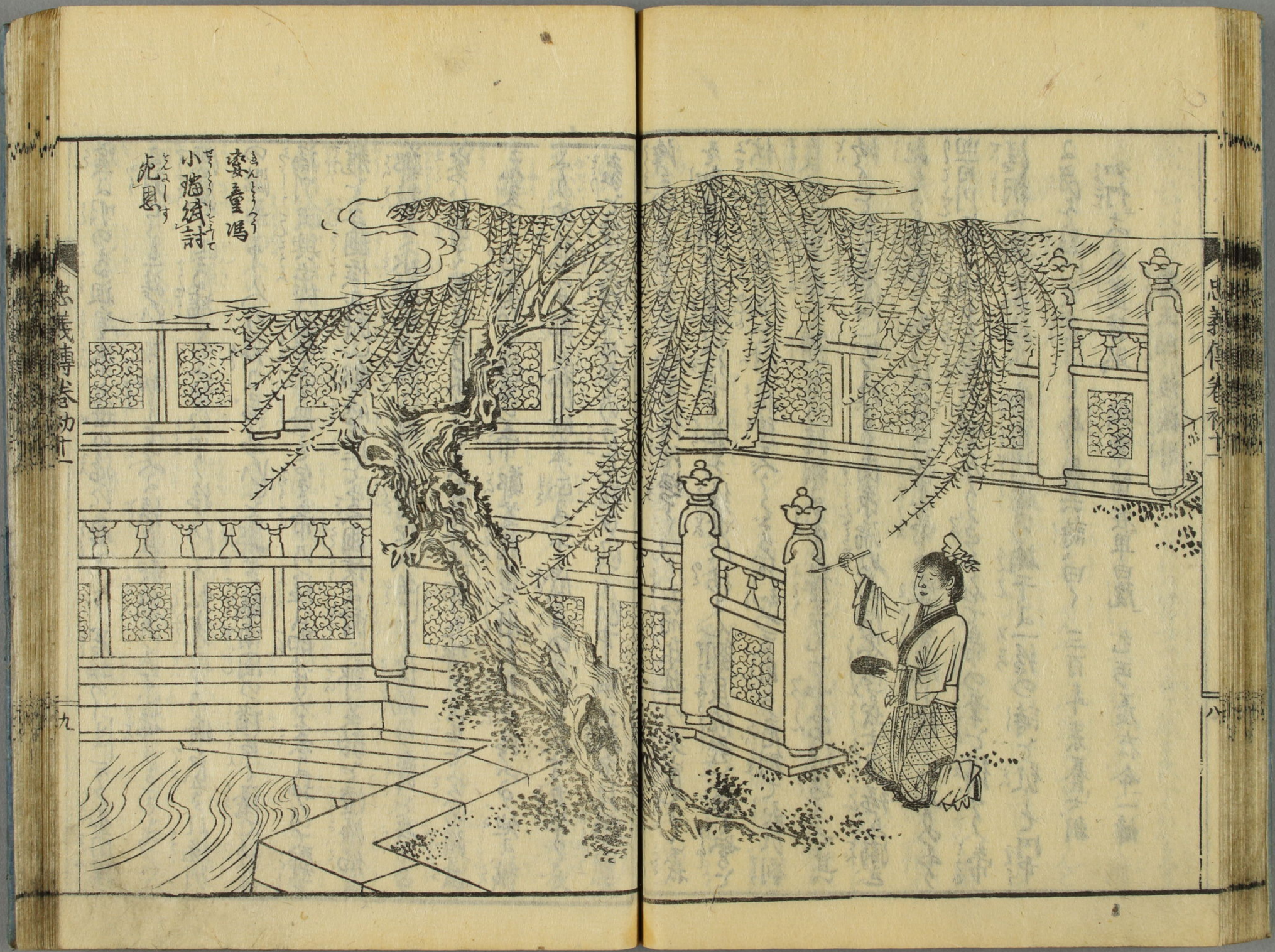

鎮江
落城

尤良は天の攻免を受て樊瓜が好へく既に死せるを以て軍兵を
のぞく湖西に去る鄭芝龍後に招撫と聞くとのゝ何の功なく勝
得るや弘光帝先と爲て流大澤を清國に対し劉孔昭劉良佐
よも後潔と加へ孤ろ小又門の始に活兵既に揚州を陥り史可法討
死せるに若未だ馬士英大に弱るき帝都の軍勢と拒抵ろ小
日くに高矢て僅に文金錢ろはるざりろうさしい都の年もち後
月くに弘光帝も湖江の方へ遷り後に死有宮て人ようし
馬士英珍別の兵に以百として御護せしむ此時端午の節なしい
鑑賞中にも百官悉く朝賀をしも帝は係るれども云う民宮
中に弦歌を奏へ朝に策に後に後に鄭芝龍に此時又みの
道兵を以て永に園に此が弘光帝の揺動安嘆息尤良

玉が河に合せりとひく急に帆を揚南風へ吹て又月八日清
の大軍私と編牲教とつゝ孫鎮江を渡て南京の城に押来る
抑南京の地は南北二十又里東西九十六里十三の門を開く外城は山
により江に接に方名一百八十里門を開くに十六其中央皇
城にて七不の宮に換三不の書院古徳武帝創業に都こゝに
廣大の京城今守る官軍僅に七百百姓共と又に弱に死悲むに
限り此月十日辰の刻白日俄に暗く暴風砂と飛石礫を
せ暴雨盆と覆に沸ぐ其中に清の大軍押来るに弘光帝は牡
丹河と園の中に女樂と此酒宴して官人に清兵迫り来と云
聞るに驚と此時に九嬪歌き歌び御衣に取り別を
惜こ生涯形勢推察して表に乱れ馬士英左右に輿に乗せ

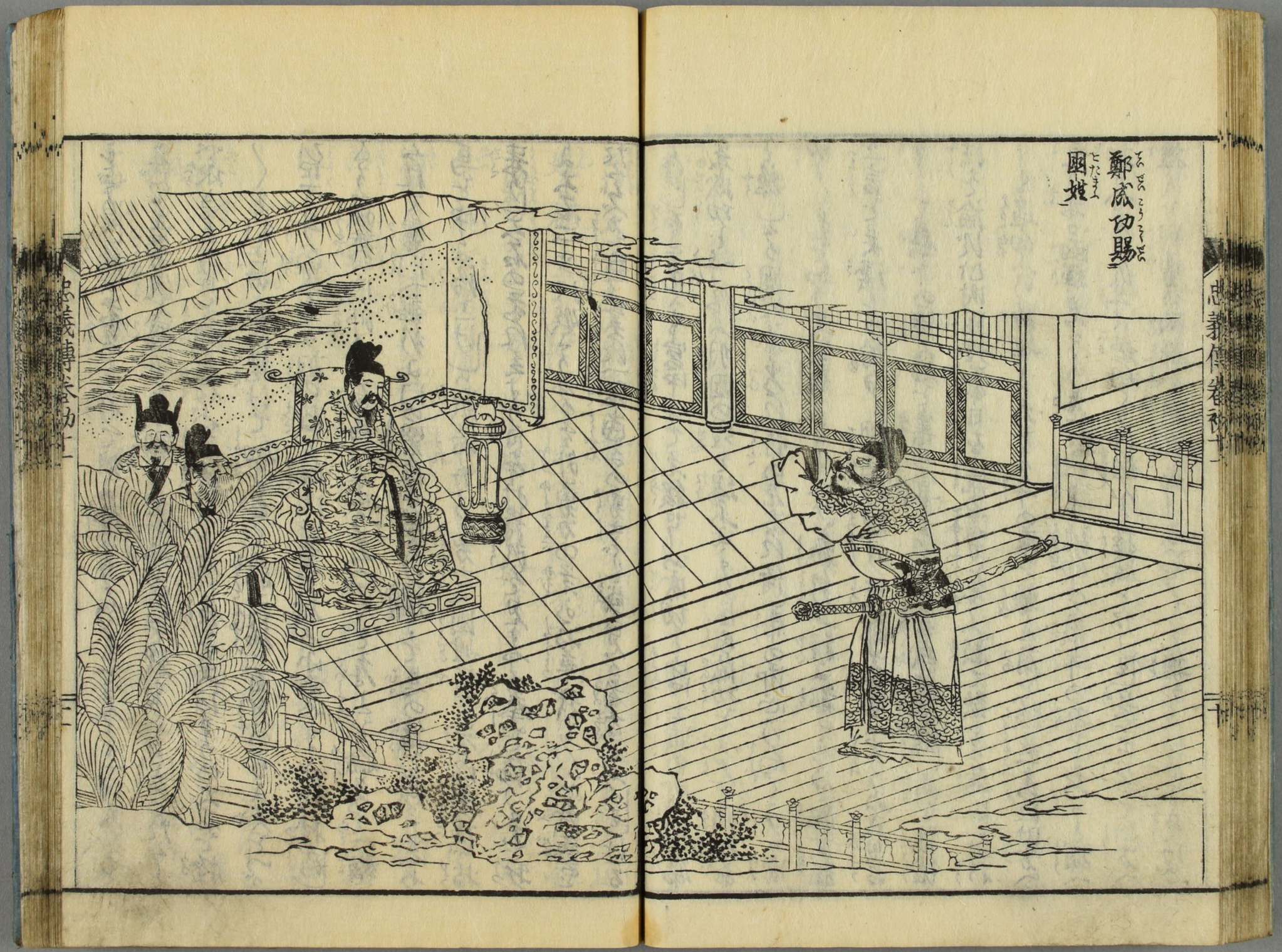

弘光帝東駕餘章湖江

鈴兵に守らせ淅の地に落し給ふ帝は宮女の美貌なるを見て孔方の
若干の宮殿家財として人語の学問なるを以て十二月弘光帝を孝府
よりの移し流大城朱太典等得功奉り入て府城に入給ふ
以城を英廷卿先に逃去居民警驚と拒て入給せず十三月より
英潮より十二日淅の地より移し付月清の豫王大軍を引て南
京城に押寄る人もなく皆門を開ひく驚と向豫王
大に喜び京中の百官を集め朝乃英廷卿酒を設けて宴を
張り小百官皆万歳と呼び云ふ弘光帝は陸に乗り給ふ官人
勝ひの心べうぐる所見くるひ
に入劉澤清海に入劉良佐は淮に清に中まり劉良佐豫王の命を
受て却て聖駕を追ひ十五日英潮の地に英得功と共に
降参せんのをとむ英得功始め白く五湖東林の文官より義
を知る何で二君に仕へく和を後世に残さん劉良佐を悪む
伏て英得功を問と対る得功は
良佐弘光帝を捕へ奉り清朝
絡と知る者は
弘光帝の
四百川橋に
清朝の橋
豫王を
如何
唐王即位福州


忠義傳卷初十一
八
忠義傳卷初十一
九
麥童馮
小弼紂討
先恩

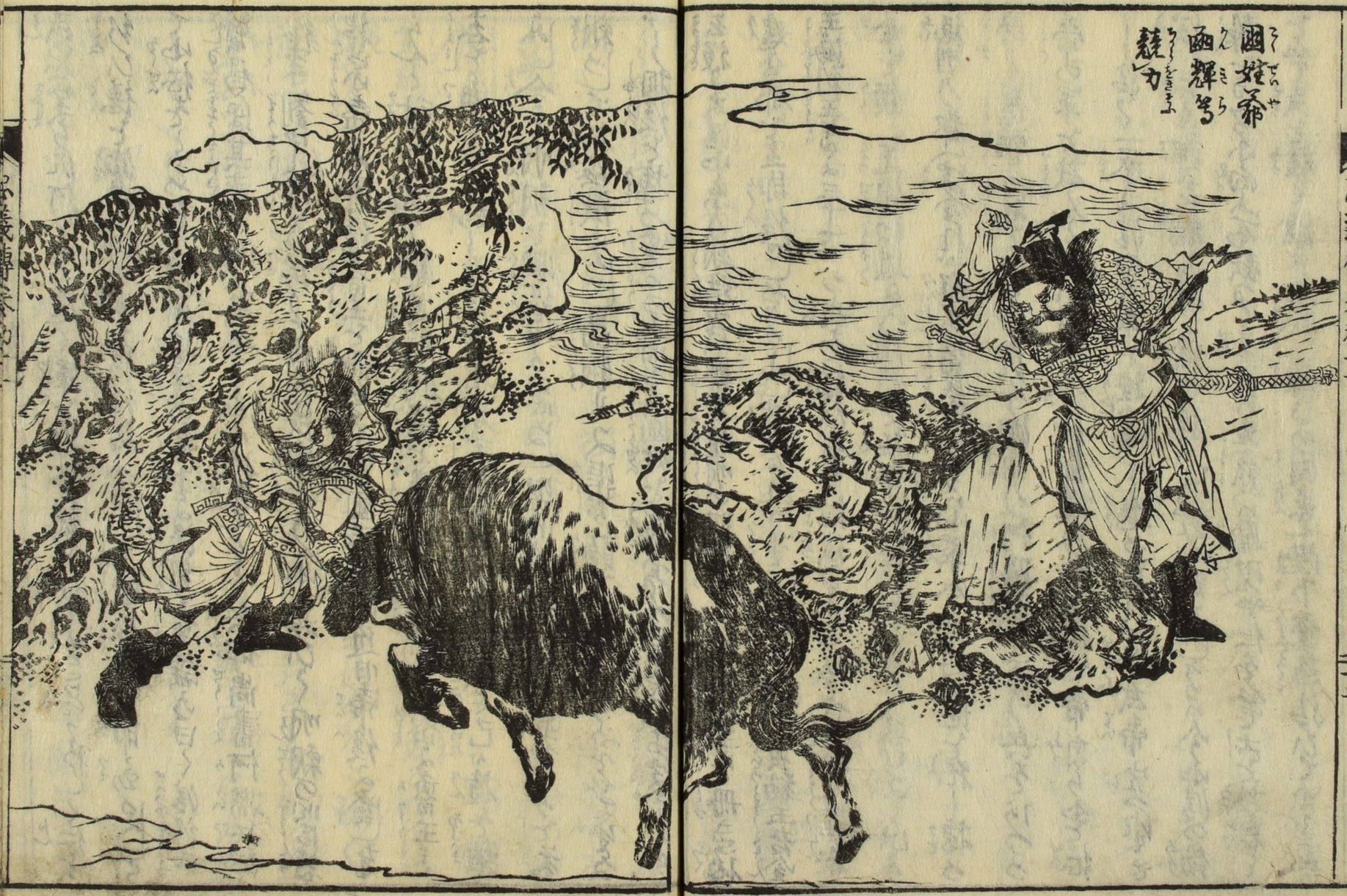
宗の明のる祖宣帝九世の孫に唐王と申君拾ひ[illegible]る元南陽
の封せらるを後ひしろ初して又の後を親族のみ小拾ひるさまく
漂流して為墻とつゝ地に出り後ひ[illegible]が弘光帝の時石出さし坑列
の潞王と申人の弟の君後ひを鄭芝龍南園の諸臣く議て終み
福州天興府の唐王と冊を宣帝の後の即ち義を拾ひて鄭芝
龍と李國侯の封じ鄭洛達を宗國侯の封じ鄭芝豹と澄海伯の
鄭彩を水勝伯の封じ後ひ完弁に人臣く侯伯の爵と受る
実に勇く敢うるあり[illegible]其外六部九卿の官を定め隆武
元年と改元ける隆武の帝鄭芝龍が忠肝と敬拾ふの他の誠
う芝龍が鄭森に附年ふの二十歳の足に八尺かいよく文
武を拾ぐ拾に日なの力と両名につひ中國の敵の猛勇之

[illegible]ふ[illegible]くも宮中まで元拾せ[illegible]ら成功と宗に帝の御氏と湯
朱藤功と呼後の明國の姓と湯ふより臣成功とえんて國姓爺
と称る國姓爺帝に侍帝の御心の向くるの[illegible]
功よく元を知り又芝龍の若く孝と親幼の後の都てのの鄭芝龍
が言と実義と為る諸臣朝廷の政の皆鄭芝龍の宗の武の宮
中まで麾下の諸大名と集ら宴とひらき名武と習練馬と弛槍
法を論じ附國姓爺日本流の[illegible]力をそ人殺て敬とる装に[illegible]
も遥の[illegible]の野辺より大なる牛の車と離を角と振を[illegible]に附方へ
芝の毒の國輝月ゝより座に乗り弛向て彼牛の角と左つゝ摘へ
押えさんと[illegible]牛は[illegible]くけ側んと猛威とひて[illegible]吳とそ[illegible]方へ
推しと剛勇の國輝金剛力と出て[illegible]やくと推ひ[illegible]


鄭成功賜
國姓爺
忠義傳卷之十一
忠義傳卷之十一

とどろし後は弟を打て地に死うり人〳〵皆と見て〳〵一日丸刀を
とげて勇力と感じる極も皆と始めとして我もく力とたゝ
べ永き夫の目と戯と打ぶ事捷と者長き大なりの大石と推る
くと引とげ宙に投げて物に当く百発の弓に矢とつゞ
ひ丁斗命なる射の技を的とし皆と射るかあやまつて射る
〳〵張英い門外より白馬に乗りまづ〳〵と馳るが一騎
これて宮門へ駆引に門の際にて紙うけ捷って馬の後と走りて
馬と中に弱とげしい数希なる勇力之国姓郭八家にて柔捷が技
乗りし大石の柔に之より日年れ背改を見よ奉と拳り皆と打
に大石二ツに破うるを外勇力のえみね年我もく武義と
たゝらべかと難に宴に一騎出るの勇士ぐと載こるる者吾とる旦ける

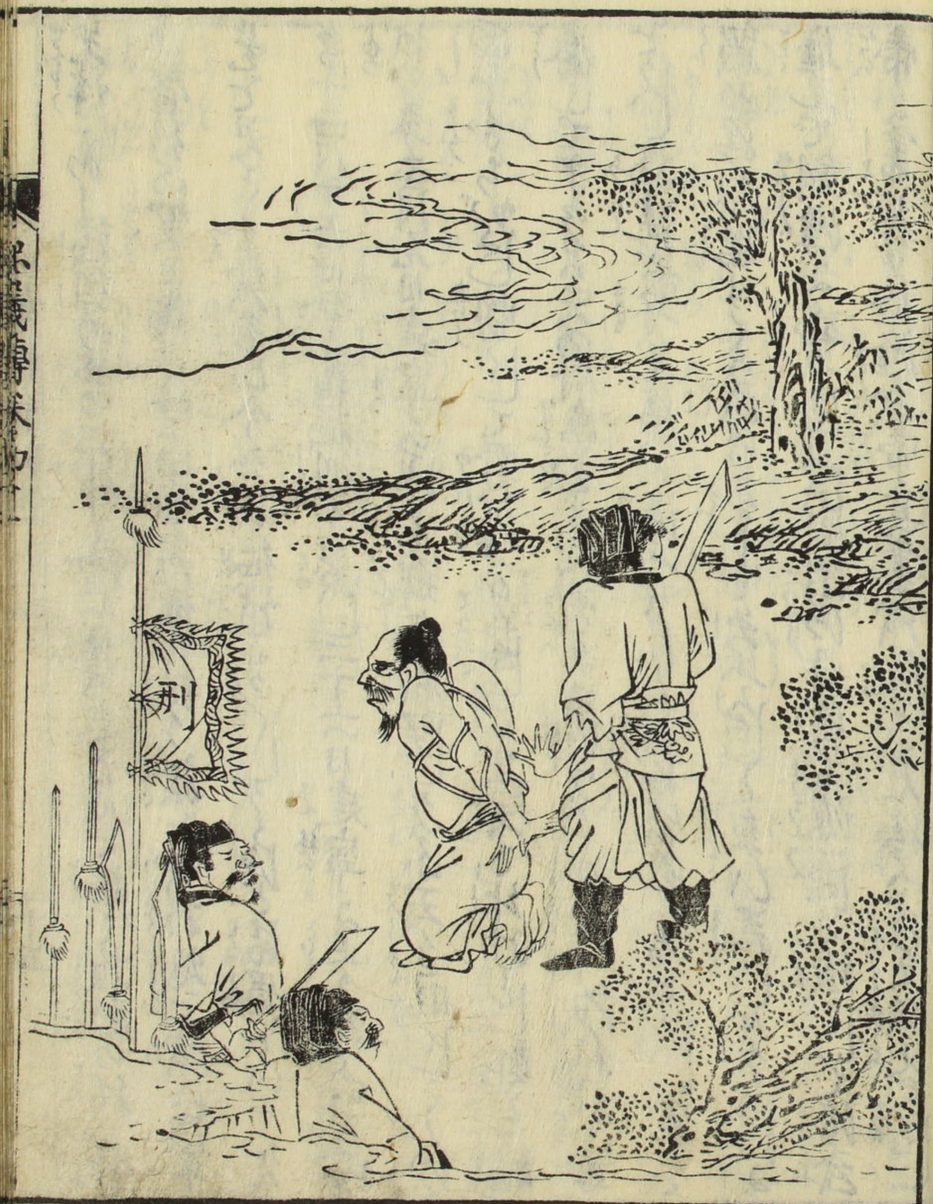
去須に大清中原の朝廷に在鄭芝龍明の四臣を召と仰に唐王を冊立福
建に都と之即位せしめ〳〵れいまて沿を下して貝勒王貴金
王湯利王等に三十万の兵を揚ひ皆と征伐るき〳〵に貝勒王謹
命と領し先浙江道に入備別を極安に抗別と軍を進むまく仕
徳別の都へ〳〵れが辞居詰奏し〳〵い小軍今抗別の地と花一掃も
〳〵く出朝に寇とる〳〵と〳〵今湖南の何騰蛟十万の兵をひつめ
帝の軍を拒んと〳〵計と矢ひび都城の兵と併せ帝自ら出と征
〳〵給つゞ一挙に清の大軍を撃ぐ〳〵と進ぬれば隆武帝実に〳〵と
皮〳〵に鄭芝龍と〳〵て後〳〵給に鄭芝龍奏〳〵い今小清の勢
強と〳〵ん〳〵小向に不敵〳〵〳〵〳〵〳〵我〳〵い勝況や仁を以て主と極恵
と〳〵民と慈く幾に見〳〵雖きの国恵之陛下登極給ひて〳〵軍


圖姓爺
函輝号
競力

民の心安らじ何とぞして遠く軍を出し大敵を征らしむべきにしかじ仁を
以て德を治めて附のまつる民結束の附節をもつて心征をこぶらせ山附後漢の都下の流行童謡の曰く清水如
鏡曷逆其素と唱へ是妖言なりと兵部尚書何苗兵部
給事劉中藻等偽りて曰く山以州江の東を抑へ明朝の四海を
治め帝の内孫魯王を冊立し魯國王と号し近日帝後の廢立を
らんと計はしかう鄭芝龍利害を奏して小征を止め密に魯王と
志を通じると知らしむ元来芝龍が一族義氏挺之已が達を懲
し全く明朝を恢復とする心を以て渠四海寇の猾を者ありと為
朝廷に招撫役と号し出朝もし渠が飾を偽り強をなして生る
べき相後を探り賢臣の小四方を國姓と稱へ為んと為代未定ざるの
ぶ〳〵我後苟も六部の長として渠が指揮を強んの口惜き次第也
よく体面を繕へは如〳〵とく苦に國を去て家に帰る隆武帝大
いに驚きて鄭芝龍と右丞諸臣汝が軍を出さず体を振て何撞劉中
藻が後既に國を去るを朝廷の久き計策にあらしと宣ふ鄭
芝龍奏して帝何ぞ事を忘るゝ為の為に強くやを大義い晩く成といひぬや
況や今都城の内に兵粮臣く何を以て大軍を出しぬるとまぐ
清ちなる時も湖南の何騰蛟を以て奏しるいよく聖駕を迎
義兵を起し抗別の小兵と退くべし と申後の鄭芝龍が諫言を
くゝ〳〵いよ〳〵軍勢論別を出て小征のべきに定りける

隆武帝親征

隆武元年冬十一月詔を下して鄭鴻逵と左光煒と鄭彩と右



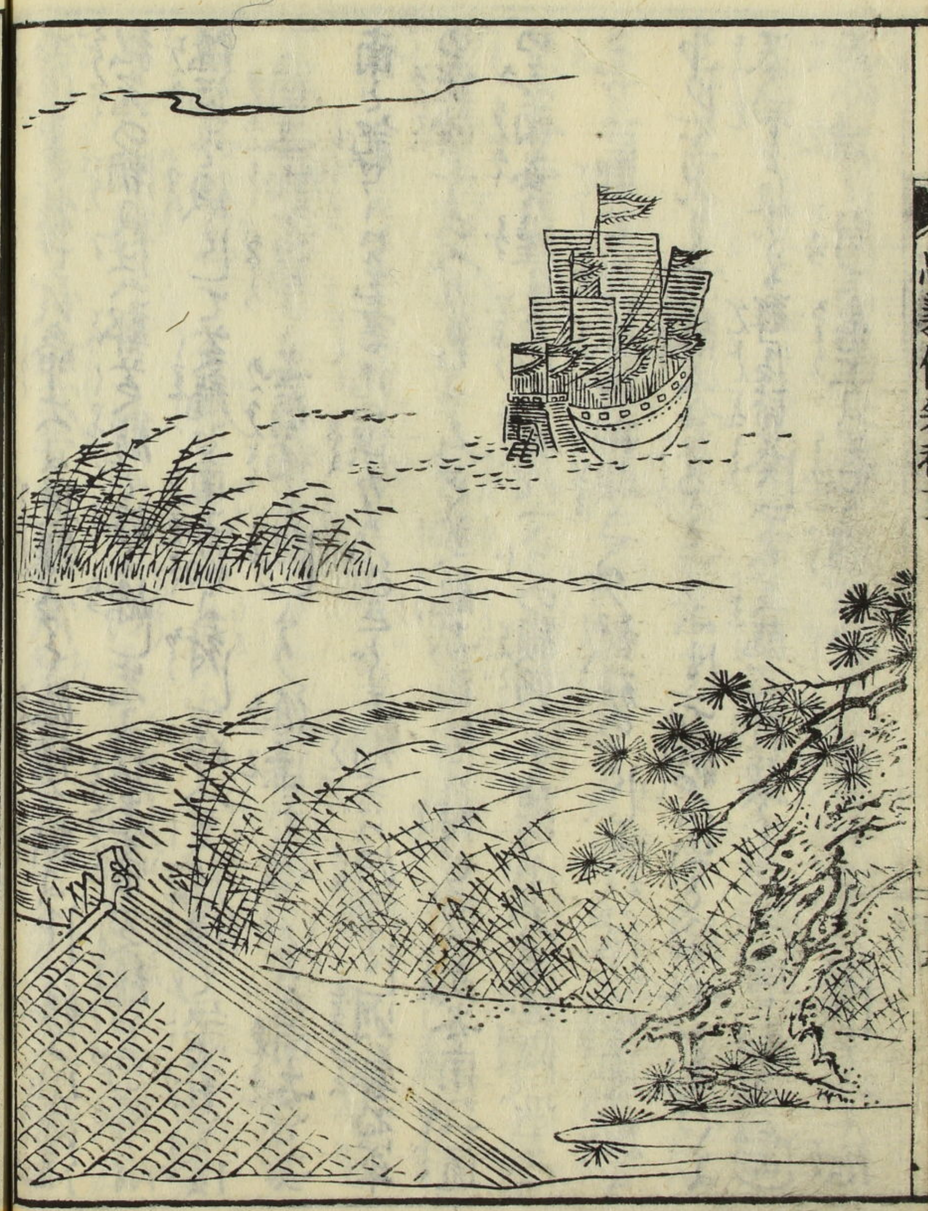
隆武帝
斬陳謙

先祥とあり福州の西の郊外に壇を築き吉日を擇び推轂の礼を行ひ路行の祭を為し終て附方風俗に旗を吹れ燭を滅じ三軍是を見んとて市人今度の征伐をうらやみ結眉をひそめ

るる十二月十六日聖駕福州を發し二十六日建寧に止り給ふ翌丙戌の年正月元日建寧の地を辭し朝陽るる小天を睦し人の面をうちかたむけして電滝の甚く其去さ汗出し鄭芝龍奏して申るゐ天の附来るの頻りなれば聖駕とうし福建を守り給へ滝ふ辭退なれど辭退なれ聖駕留め給ふ故に恐くい民の帝と共に奏し奏しるる小紙を進んで劍滝に与り給へ附附の島王陳藩を使として滝武帝に書を奏し給滝武帝其書を開き見給ふに宣紙又と記し

て陳下と称せば帝大に逆鱗みく陳藩を獄に下し給ふ附陳藩弘光の朝に仕へ鄭芝龍と好を結び先に弘光帝芝龍と謀る附陳藩を使として芝龍と南安伯の対し給ふ芝龍潅で記書を讀に南安伯と誤く安南伯と記しう陳藩を附やるる南安を安南と記せ〜い芝書紀の誤なりう統ども綸言汗のごとし別鄭ね軍の使者とうて芝龍安南伯に対せらるる安南に道の名南安の僅に二邑に寓に一宮の額勅を地の小大天地懸隔也芝龍鄭芝龍陳藩相睦さの親族のごとしれば今陳藩が獄に下しとうて芝龍大に驚き奏聞して明に出さいやとさまざまに奏聞とすれども群臣皆奏して云芝龍忠軍なれば陳藩と共に謀反小藩に計て富王に志と通じ地に附附寓と記し

鄭芝龍与
國姓爺偉
泉州



濂と報じて後の天ひと降さ給へと云隆武帝是を伝ひたまひ
紙を法濂に引出し斬刑に処し鄭芝龍是を聞く国辱なる
と市に入り斬首と偽て曰く除去ひ〻〻陳濂と斬るべし我
今帝を立て〻報免と希ひ来るべし列朝の統を立て命を
待て出べし勅命の後官位割り民を安んぜん隆武帝芝龍が
詐を信せ給ふの旨勅許給ひ〻〻急南の物語を聞と延〻密
勅を作て陳濂と斬せ給へ芝龍い叛ひ得ずして勅を出て
市に入れば陳濂が首を抱て鄭芝龍に
る帝と共に服〻すう且侯人の後云と紹と給ふと嘆き其心を
楽まん浙江泉州城を海賊来り襲ふは急を告るの擒の国
引ぎく国姓是帝に対ひて申るい海寇吾陵と犯し捕玉る民

我〻が根本を失ふ迄其むふく防禦ぜ〻〻即時に勅を
〻〻私と報て安平城へ帰り乞ふ〻〻鄭芝龍と謀て
申るい今海寇吾が泉州安平城を犯し三関の兵糧悉く焼是
を出し我らが国家滅る浙い国家の患是より大なるい迄征せどんば
べ〻〻て是も兵と引て本国を去ら隆武帝大に弱り給ひ急
使を以て芝龍と申る朕も若し征と〻〻申給ふを何ぞ
浙芝龍が私いまく叛逆と疑て安平を焼らせる鄭芝龍
まかくせ〻〻ば清軍出力と失ひ武い痛し喝し武い餓死とう
と喝へ我も〻〻本国軍を立せば営中寂として人なし此の浙
清の大軍師貝勒王い是金王海利王等と数十万の大軍を引率
浙東に富王と擒と私弘光の朝に仕し馬士英阮大鋮が徒多

関帝の
霊爵後
臣
關帝廟

く魯王のりくみをくろも悪く清朝より降服し奥勒王が大軍被源の城
と郷導し仙霞関と押入澄武帝より迫らんとん山の麓より関帝
の何わり其者にもかく流大城が奈ふ馬忽押ぐろきるく敵で
を地さ落に流大城血と吐り三井斗年紀と岡へ乱うるるき
雑類り雑兵し流大城が不足ちるか関帝悪こ法ひく蹴殺
法と抱ちうんし恐ざる者り浦城を護る大る鄭る紅と云
者清の大軍と恐れ門と閉くく義と守るさんぐも城中の三日程
乱を敬じ清軍と引て城を入らしむ奥勒王逆ふる紅と捕縛と
刎く降参せよく進むる紅者を勧ま囲る奥ハ京忠〈光孝と乱
しむる不義之悪者ともを勧るばせるるも何の義うみん出逆
る斬ぜしく遂に寂せば刑る着奥勒王いよ〈大軍を駆て

帝と迫り急之浦城の郊外て澄武帝乃輿可一人と生擒うり
情に馬士英が澄武帝を望る内通の書と拾うり奥勒王如て
馬士英が前と斬くを不に希うる老うんを忠義の英人と
て軍民嗤吐〈〈足らり市乃ぞ〈

# 繪本國姓爺忠義傳前篇卷之十二 目錄

第一回

隆武帝崩汀州
陳愼祝龍袍曝日 穀又鑑之図

第二回

泉州武皆降順 清之図
貝勒王定計捕鄭芝龍

第三回

月図
小軍隔安平城
韓國山乘圍安平城之図
鄭芝龍妻孔千義之図

百第四回

國姓爺破廣東

國姓爺藻澄之盟主之図

國姓爺藻澄之盟主之図

黒彪喰十日糧侵福建之図

函輝集小軍馬之図

國姓爺斬陳龍嘯素之図



繪本國姓爺忠義傳初篇卷之十二

隆武帝崩汀州

同年八月廿一日乃ち小軍競ひ来るの急を聞くに隆武帝宮廷諸司御馬を召し百官を引き頼州の方へ落ち給ふ貝勒王は衢州より國関を攻り延平を開き夷の甚急なり紹府王士和僅に残る余孽の兵を以て方に配厳密防き戦へども同じく余る清の大軍攻へ禦ぐ能はざる紙なり衣冠を正し端坐して

雄風烈を揚て虛城

正気従来履險貞

孤忠を栽有誰明

一十月延平府陥

書絶く後容と自ら縊て死す

死も隆武皇帝の御石を埋む

陳慎視龍治
曜日報又讎

習はせ給ひぬ孫の意一方聖意にかなひ給ひ順昌
ちかく希世給ふ小軍又劍津を退散するはしいさましく強き
ぬる小御馬さきのせ道と急ぐ官軍皆落失て呉兵継孫英
明後望の後ひ帝もるそ義をたもいたはしく廿七日ふは汀州
ふるふ孫方ん頼州の府城を若ぬ後御衣と脱きて日を曝ふ日月
露霜ふぬもそがちなれい英明後御衣と脱きて日を曝ふ日月
龍風と強せしい類なくも足警ふらるる宮ふ先ふ刑ふ過ひふ
陳通ふる深情ふ希ふ又ふ眼ふくして刑せらるると嘆り
数十騎の兵を師ひ帝を追て又の俄を殺ぜんと汀州ふ来りるる
被龍風の御衣ふ乾ふる紙ふ宮ふ寄宮ふ留りみ紙ふ城
門とかて帝の庭牌と仮ふ宮て入んとふ然得ふ云

希敵兵なるるを知り剣を抜て防ぎ戦ふ張致遠ふ希隆武帝
の御前ふ参ふ暁き奏しるい事ふ暁ふ急ふ過ふ宮ふ帝ふ衰
衣と着ふ聖意ふ代ふ宮て死ふ甚同ふ朱継孫英明後
両人を宮ふ同道ふ遣ふ給ふやふ奏ふ帝御成と流ふ給ひ
脱何で死と辞せん郷ふ死集ふ多ふ宮ふ致遠参ふる
こい云申奏ふ紀聖意ふ申ふ宮ふ致遠参ふる
用ふ暁ふ事急ふを下紀信ふ抜て代ふ太蘇の下て死し
遂ふ漢ふ百年の基と用き給ふいぎ給ふ致遠自ら
帝乃衰衣と着流長刀振ふ歌ふ向ふ深情ふ宮ふ隆武
帝と云ひふと矢つひ宮て社稷前と宮ふ慈得
もふ痛く戦ひふ強く味方もあざれい深慎ふ為ふ新ふ

泉州民吉
降順達

帝に望后と仰き奚明俊朱徒衍が如抱すて澎湃河列を落のび
穎列の府を入んとし給ひしと洛の大軍湖のごとく追来り絶の妻
大人ぐるに帝と婚に望后も待ぐに擒させ給ひ又奥勒王大
勢び義列の都を奪ひ痛しく隆武帝望后二方と市を陥
て斬ける福建の人民歎き悲むの限りなし奥勒王茶徒衍奚明
俊が忠義を感じ又品の位を与て招くこと度も痛き諸て遠く遊
る其外曹学佺馬思理等んどと始めとし配を強く勧めうに武
を繼と武い河中の身を投じ世の表とぞなる

奥勒王実計捕鄭芝龍

洛の大軍師奥勒王い福建の都を入大る変成孫韓固山の両人と
以て真列邵列汀列漳列等の國々と制せしむる小風を除ぞ来り

降る隆泉列の鄭芝龍が一家妻子城と保ち守り武威望んを
もつて敵せしを芝龍元来家富み兵粮山のごとくを於て数十艘の
戦艦城下に浮め十余万の強兵を以て今と守り真を勢雄きあり
さまなり隆武帝若芝龍が謀を見い固く福建と守り給ひ
容易に喪ぶきを況や変幻市を斬き給ふの系代
実の國雄なり計何奥勒王泉列の地を実拒くを徳化ふの不和
の知縣孫元素はじめ降旗と立ち百姓多く敵と制法の
を聞く泉列の官員郭応昌ふ者而より鄭芝龍を変除し
奥勒王応昌と仰て使とし鄭芝龍と主を対とべき詔書と持せ
奥利害に従く招んとし其詔を曰く

朕自兼鴻業天下を万邦諸歸順化国誠一貫自古

貝勒王吳計
浦鄭支龍


忠義傳卷初十二

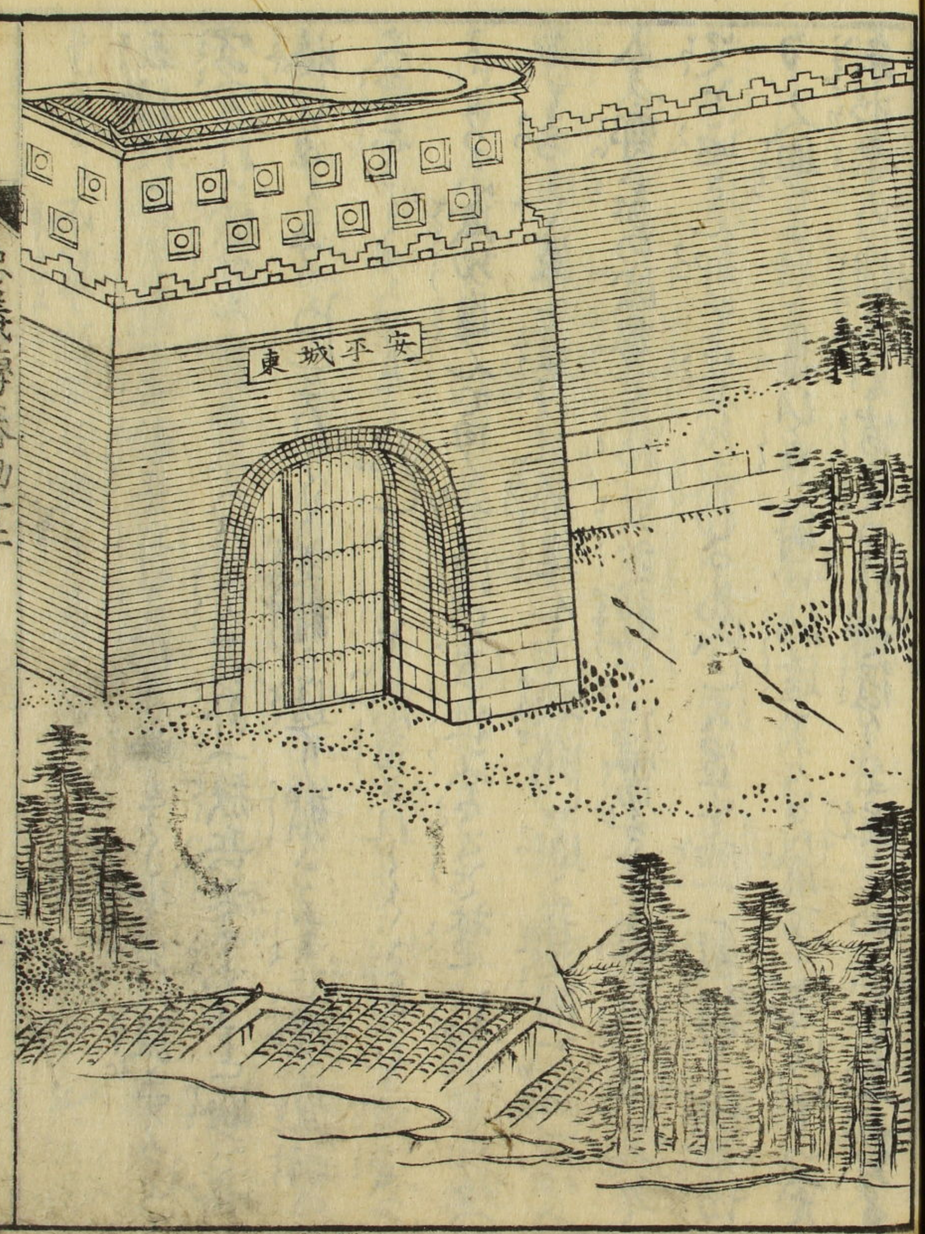
有高名傑階張其中朕素及諸策其後朕所以深眼也
茲間其名鄭芝龍武略絶倫全機業久積股撰海邊草
寇今已安堵民得樂業經生甚孫朕意也用封三省
王顧欲見面念其功業謀績朕詔親宣宜勤厥謝
恩拜望帝畢

芝龍乃入復りて其詔有り深切なるを郭必昌が説て皆利を
して喜ばしめんとすれども心怒ること変せざれば況や清の大軍
を率て安平に迫るを怨いまだ説ども信とせざれば郭必昌
急を告げるを以て具勅王を告ぐ具勅王執て令を下して韓国山が軍
とまぐりて安平を地方三十里が間清兵を犯さんとすれば芝龍
が怒いまだ滅じぬうちに具唐王と建て隆武の朝と冊する一事を聚

て清王必怒んぐ芝龍と冊とび上て怒り具勅王又以ての上奏を
芝龍の書と送る其言に曰く
吾所以率師軍者以唐藩也人民事上苟之
可ゑ忍渴其力力盡不勝天則投明而事業附達不世
之功以高傑事也若如軍不輔之吾何用如軍哉且
西粤未平今清國粤總督印以相待吾不以強如軍
乗見者欲高地方人才拔也
芝龍此書と見て始めて大に驚び急遽芝豹鄭彩其の国
姓を奉と招きて相議してやうやく清王と具勅王と我と招くの
源切なり彩どんび怒るく小仇ゑり吾幼てたと人誤りみとしも海寇
力と帰せば安平城と奪らんと何の恐ることみん附の遽遽芝豹

しく言ひ採へて曰く夫の鳥は国と離るべからず我一族元来水軍よ
り結ばれ水を入雖と遊ぶ小鳥如し何ぞ蕃夷の封を受給へ中国
姓を希も席を進んで止て曰く雖翻い余欲すらく仁義を知ら
大軍を率て来一戦すも及ばざる小却て我一族を拘て盟令
を私さんとすれば不測安弱而法和者謀也人倫の常に非て一族
欲の計なりてば万悔とるも無るべし只一族の兵は安平なる
時く一戦の雌雄を決べし外の何の義論ぞ芝龍是
を安とせずして曰く徐多が言理なるに我保大義と配
兵に勅して民を安んぜんと我今小弟の封を受て仏国粤
乃民を安んじ武備を講じて時乃動と後再明の社稷を興せん
歟功成て代て国廣と保ん邑国姓希及び三人の兄弟徐と拳

て固むるに鄭芝龍又よりて鄭成功十月十又日又百余騎の逆兵と後
へ逆よ福州の宮に拠く奥勅王大よ起び芝龍と向へ相戦て
て欲びを見て策に打て折て大に酒を飲むの三百三騎
悉一騎辞中よ除じ芝龍と捕へ小弟に送る芝龍奥勅王
よ向へ曰く中なる小弟に為く法王よ人の元来孫ぐ人不
何で見て辞せん然ども分路遠芝豹弟に鄭成功ごかくと
雲に海上の兵を動忽ち及びて奥勅王が曰く芝郷が與る
るよりて我もよ為ると不内兵弟帥よ朝廷よ陛見よる
しく事と儀ひて守護乃兵厳く相保小弟へ急
ぎて芝龍が又百余騎の逆兵皆別営に来て
とも叶ひ潮に芝龍が書に求めて安平城よ逃りて


東城平安

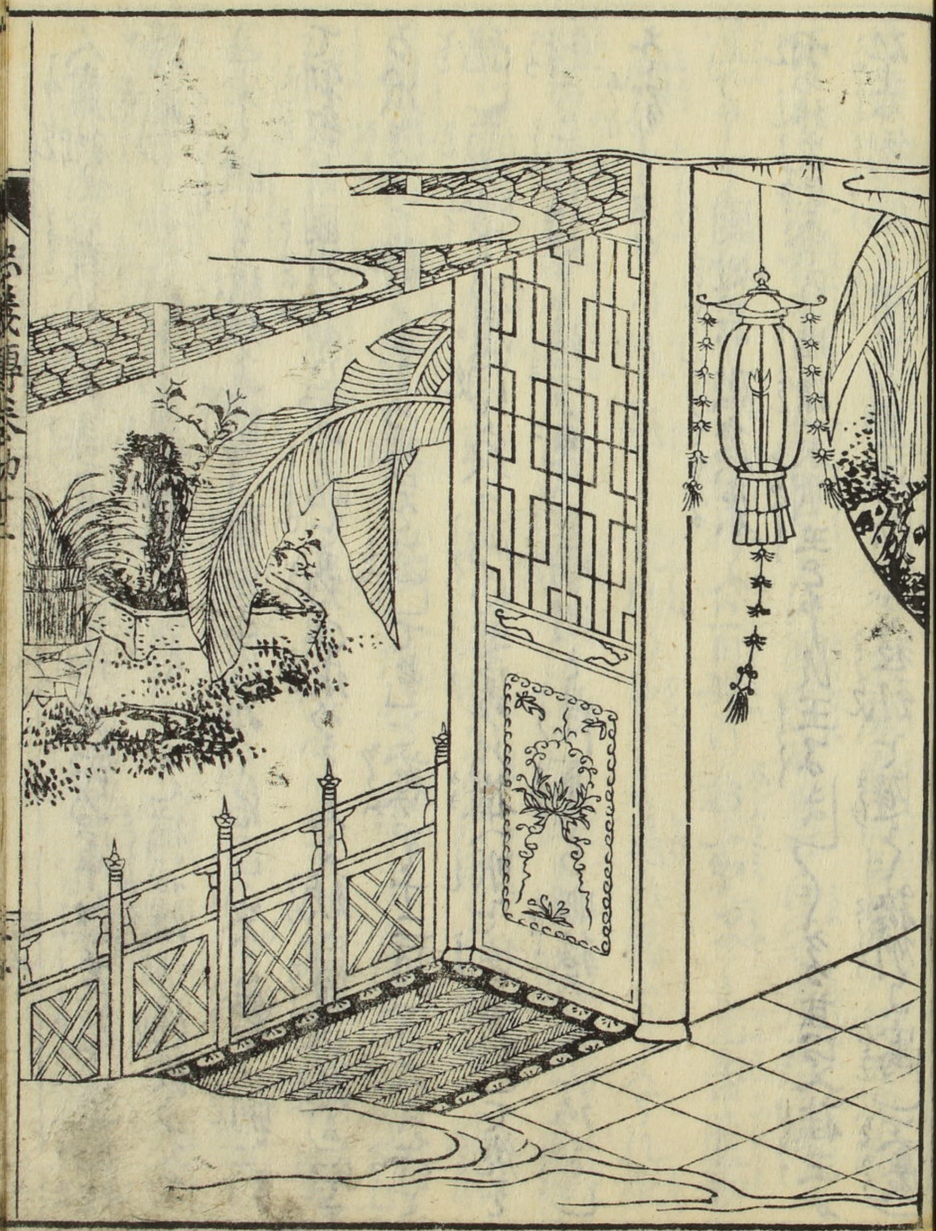
輝岡山幸
圍安平城

小軍師安子孫

云徳に鄭芝龍い貝勒王ゞ計りを謀り幽閉く小西に配きるよ
家へられい成功を始め三人の弟其外一族兵士を多くと聞て
悔むのきりに成されども芝龍ゞ送り韃靼と漢の清朝の
大恩忘るゝ事を思ひ成功を不審られくさまゞ孫義の
ゝるゝ成功進んで向く菁漢の為に攻と楚に向へ
どもゝく軍と退けに孫進んゝ換韃に逆ひ楚国と戦へ
今鄭家の威勢と落に又芝龍と清需るゝも何で容易
又と返さん却て害に求むるゝ成功ゞ言は
る人迫て是を集ひ兵を謀り清を滅達やるい成功ゞ言は
来小弟の消息も安定めに て猶ゝ軍と出さんも幸多

に況や兄小弟に為ゝ安子孫ゝ月日過ゞ
ゝ事を鄭で恐れ溝を好んでゝ者ゝ
を乱て誤ゝ皆是を〻日暗く飛物と
兄会せゝ月日下向小弟韓国山城ゝ数十万の兵と引率安子
城と元囲く綾兵多て責ゝゝる国姫爺と始め鄭家の一族ゝ
げゝ兄ゝ防き戦ゝ兄ゝ海ゝ綾勢ゝ韓
国山兵ゝ下知厳密討て責ゝれ城中防ぐゝ難ゝ
ゝ私ゝ元帥ゝ海ゝて遊ゝ小兵戦ゝ安子孫ゝ乱
家族と捕ゝ婦女を集ひ孔明狐籍甚国姫爺ゝ毎日七十長
湾の澤丸山の於若ゝて其宮殿家敷ゝ元帥ゝ韓国山
兵ゝ大ゝ成び賞ゝ揮ゝ海ゝ已ゝ安ゝ山婦

鄭芝龍妻
死平義



人肅然と容を改め委ハ是安南国の龍図の軍鄭芝龍が妻國姓
爺成功が母之何ぞ小虜猪豚の如き数万の城を陥し溺るるが
如く懦弱より猛勇を接出し韓国を亡ぼし屈山大の如く剣を引
て刺殺し國姓爺ハ母の屍を見て大に怒り大の敵き賜の源を思
ふ故ひて驚き怒を抑さめ喪を發して是と戮す十二月一日大の兵と
配し南海中の廈門と云る海小要害を構へ明と戦ひて他を
討の義氏ハ遠く海の名氏恩明朔と唱へ專ら順後乃ち為ざし
を取しる

國姓爺破廣東

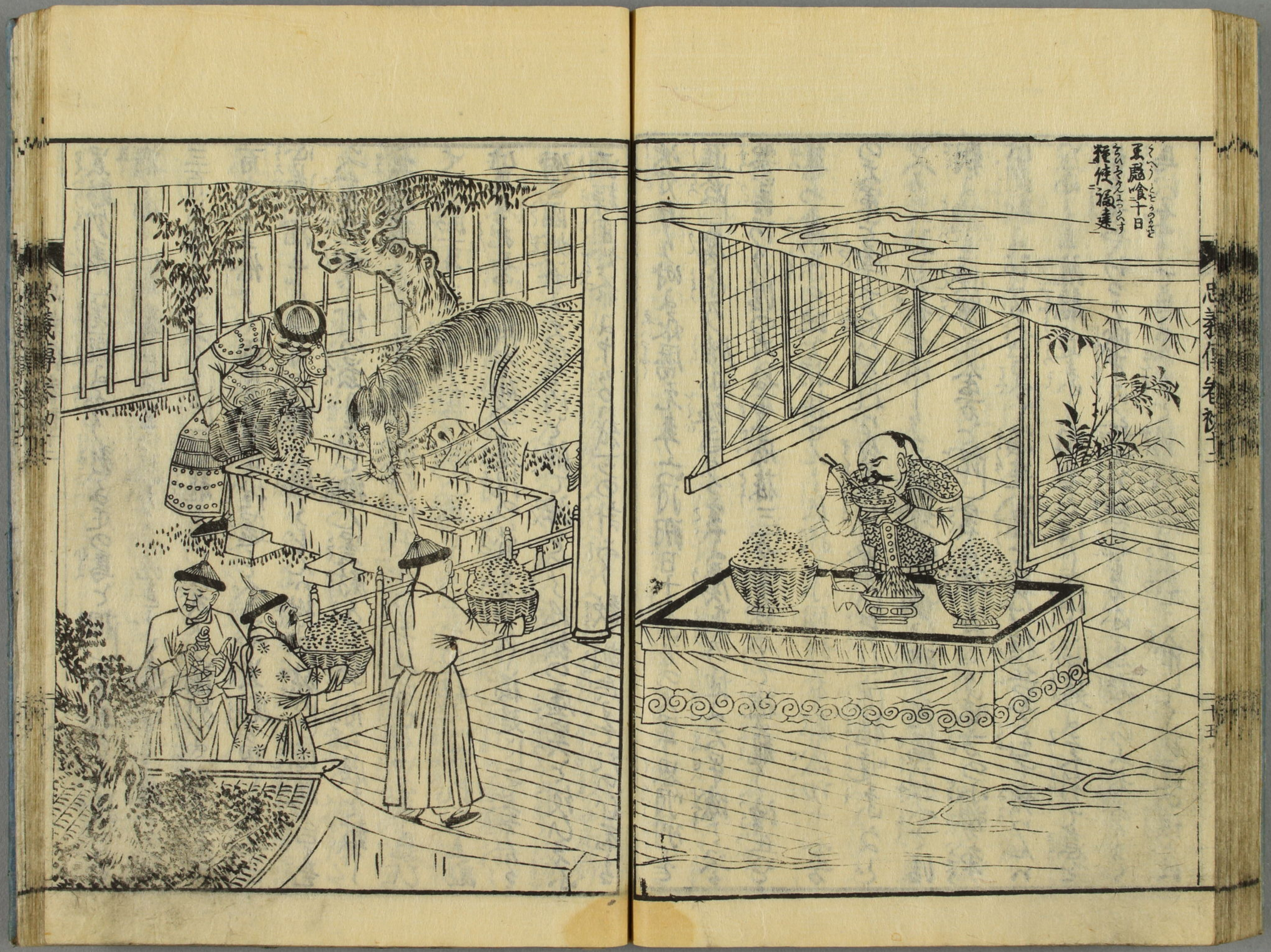
明の神宗皇帝乃嫡孫永明王と号し王る甚又桂王が
弟未衛湯と対せら且絶ひ寇孔と遊く猪洲と寓し又麗

絶ひて永明王喪と籠り御座を小廣西の西に置式稚王埴滅る
時ゆんどつる者冊立て監國王と成國姓爺是と漢でやるい大王乃國と監絶ふ百姓乃希望と
順ひ皇帝乃位と登り乃民乃帰くと遠き絶ふるるる永
明王宣く寡人未先帝乃勅命を受ひ御是と洋と若と國姓
爺ハ曰に曾て隆武の朝と仕へ時帝崩ひ日く永明王い神宗
の嫡孫朝家の正統と朕と為る永明王と屬ひ是と
沿り内に乗く宜り大王繼ひ絶ふるる義と抑ひ國
武稚王埴等と議すく丁亥二月朔日肇慶府の宮殿と
外宮と定め永明王即位絶ふ元と永曆と改め文武の百官
と定め絶ふ而して國姓爺鄭成功い國廣と順後小軍と退

國姓爺鄭成功
之盟主

くだらく方と永厝帝に奏し叔父鄭芝龍と思明州の城を止め
鴻逵と紹興の大軍と発せんとて先思明州の城外に壇を築き金の
幣と甫と銀錢をつゝ孫敷白馬を殺し天地をあがめ烏牛を殺し
地を祀る鄭鴻逵と隆武帝と盟を結び
壇上に向ひ香を焼き再拜をし諸将に香を續ぐ成功を願
ひ盟文を唱へ誓て曰く今番の義兵の為に軍中異性義
と結んで兄弟の誓をなし一心同体安んじ下に庶民を撫ま
軍中渾て十万余人同年月日月月日日時に死んのを希ふ皇天后土冥冥
むき盟を遠ぐ天地と共に竟と滅し地に竟と罰を蒙べし祈り終
牲を割て血をとりて義を勇たるかりとまい真を盟しき

次年永厝元年六月朔日十余万の大軍思明州を
進發し廣東の路小路を経て廣東の地に大星城に入る
要害にかゝり清の大将李成棟三万余騎にて横籠の陣丘に
集り廣東の地を招撫せんとし先に小国姓茅鄭成功十余万
の大軍を率て向ひ来れば李成棟震ひ恐れ陳龍達素うのど
入る大将と集り議し合ひ国姓茅に世に双なき猛将と清
朝の猛士二千余騎と配し寄に押よせ清方の小勢を
以劉欽にかゝるべきよく猛進急と告げ援兵を乞て戦りんい
いふ小と云陳龍達素の勇もとより猛進に交り急を
告る者やうと城中の兵士と強撫とる小思慮とつゝ者ありよく
馬に乗りて日夜星と紛て出馬し義進の後に


玉兎喰二十日
稚使福達

黒彪仔兼（光厩より取る疋の馬と相）栗毛なる駿足と
撰び出し此馬真よりも黒の弱なりし然れども殿いまだ盛ざる
三百里なりとて走りぐ（陳龍が曰く宋より福州よりおよそ二
百九十里餘すく両日の内より往還とべきや黒彪が曰く先づ甚
心易（然れども十日の糧を給ぶべし陳龍が曰く先
又案（如ぐ何の器より先と給ん黒彪が曰て自ら腹を割
我腹袋よく十日の糧と納む何ぞ外の器物労せんや宋の扶ひ
て黒彪一斗の飯を食ひ尽し馬もまた三斗の草を嚙て黒彪
此馬より起き走り勢を加へて迅風の疾るごとく福建に至りなる
附り國姓爺が大軍門と濠て陣をつゝ孫欽の虚実を窺ひ知る小
函輝國姓爺より中なる我一ツの計あり欽い胡兵すでたのむ不ら

馬より我ひとりの三郎清兵川の向ひより大宛の名馬野
畜せり此馬と黒彪今の宋天子の当て平地の歩戦をなる氏欽
を挙り崩（國姓爺此計大よりと同心（れい函輝村く
をさぐ需りて雌馬数十疋と宋求め川の此方より野飼とる小胡
國の雄馬彼雌馬の嘶く声を聞て自ら川を渡り此方の岸より
集りる黒の猪若数百人樹の陰より出て暴く捕得
りさんば二日の内より名馬と成るべる余疋より及べり欽の夢成
株多くの馬と黒を別当の守りと意り庶民より偷まとけ
ら（と軍令と厳より附り両日と練て黒彪福建より入り
敵（なる此以廣州の地より唐王即位（兵を配（て福州より向
ひ梧州より永明王位より即師と出（此有小安大人丁黒山十

西羅集
小軍馬

万の兵を引て永明王を防ぎ海利王嗟勒韓国山に十万の兵をゝん
唐王とゝの海州に本営をかまへ守りの軍兵減じがたし西方へ
向ひし兵ども戰陣せさしがに援兵を出すべき実く敗を守出す戰
ゝるべしと若々しが奉盛拂け報を受て大ゝ力と笑ひいそぐい
せんと議をなす国に国姓爺が十万の援兵稲麻のごとく来る国
後地とおうけ大笑と呼び呼んで攻害いをさまじくこそ
ゝ人ゝなり城兵も実と破られじと矢石を投げ防ぐとゝへども
遂に第一の門を奪ひ大軍一日に孔を入れ城兵も今は叶じ
と心を決し本城の門を開き開と出て降て斬て出さり幽姓爺が
先鋒揚祖唎叭を吹き鼓を鳴し槍屏障を捨て家を
捨ば此兵多く馬を奪ひ戰ひ心を捨ざるべきの命を孔



出さず箱物を奪ひ大将陳龍芝と見ることの叶はず蹶ると
遂に小舟に便乗して南海の鄭成功のもとに罵ると
国姓爺の命の戰地とひるべ人三万の余の日本刀と左右の手
さげ獅子奮迅の勢ひとなり陳龍を討てうち戰ひ三合ばかり
陳龍と切て両剣を捨て槍を上げて突来るふいをうけ引
ゝる日本刀国姓爺がを抜きの勝の落るごとくなる心物を
馬と人とを心切と国姓爺猛を延て嗟素の既なる一刀を
行と破る如く新やうの其勢ひ真に凶ごとく〳〵の関羽
張飛が勇とゝへども先は手及ぶべきと小兵粉のごとくなる
ゝ大将を感ずるに兵一騎間道より海州にて級ふ
国姓爺が十一万の軍勢勝る事中り凶ると幸殺例に拾ひ

國姓爺の軍勢陳龍墜

と叫ぶと滿城皆興となる一つ國姓爺城に入る百姓と安んじ
函輝と城を守る〳〵一万余騎の兵と陣を撤軍凱歌を揚て
思明州へ引返る彼の小船を成拂い兵一騎福建道に進行
〳〵ぶ能く思慮を巡る小船一戦に利を失ひ福建に向て歩〳〵更
勅王兄弟と我とゆるしまじ如じ色より格別なるゆう永曆帝に
降参せざや〳〵繋と延〳〵て格別なるゆうぬ

繪本國姓爺忠義傳初篇巻之十二終



第一回

第二回

繪本姓爺忠義傳第篇巻之十三　目録

國姓爺集南洋諸
國姓爺製編船と興軍士を図
國姓爺美南洋諸を図
國姓爺隔南洋諸を図
國姓爺放火屋城中男女を図
獲燕恣を煩城
詔渙棠詔而獲燕通侯柳力士を図
曾揆祥兵懇煩城獲燕を図

第三回

獨燕之國姓爺陣

國姓爺攻安海城之圖

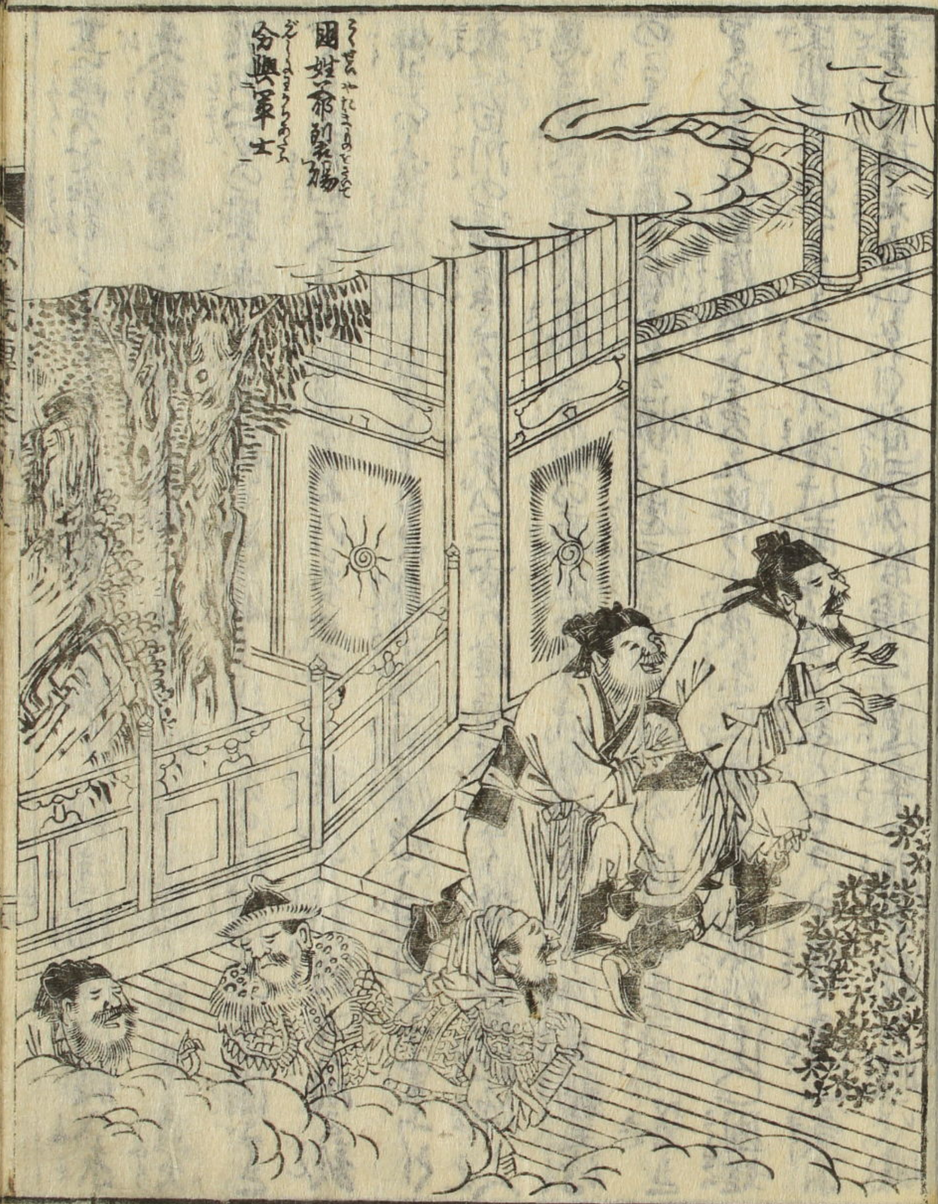
柳巖大戰義仲林勝之圖

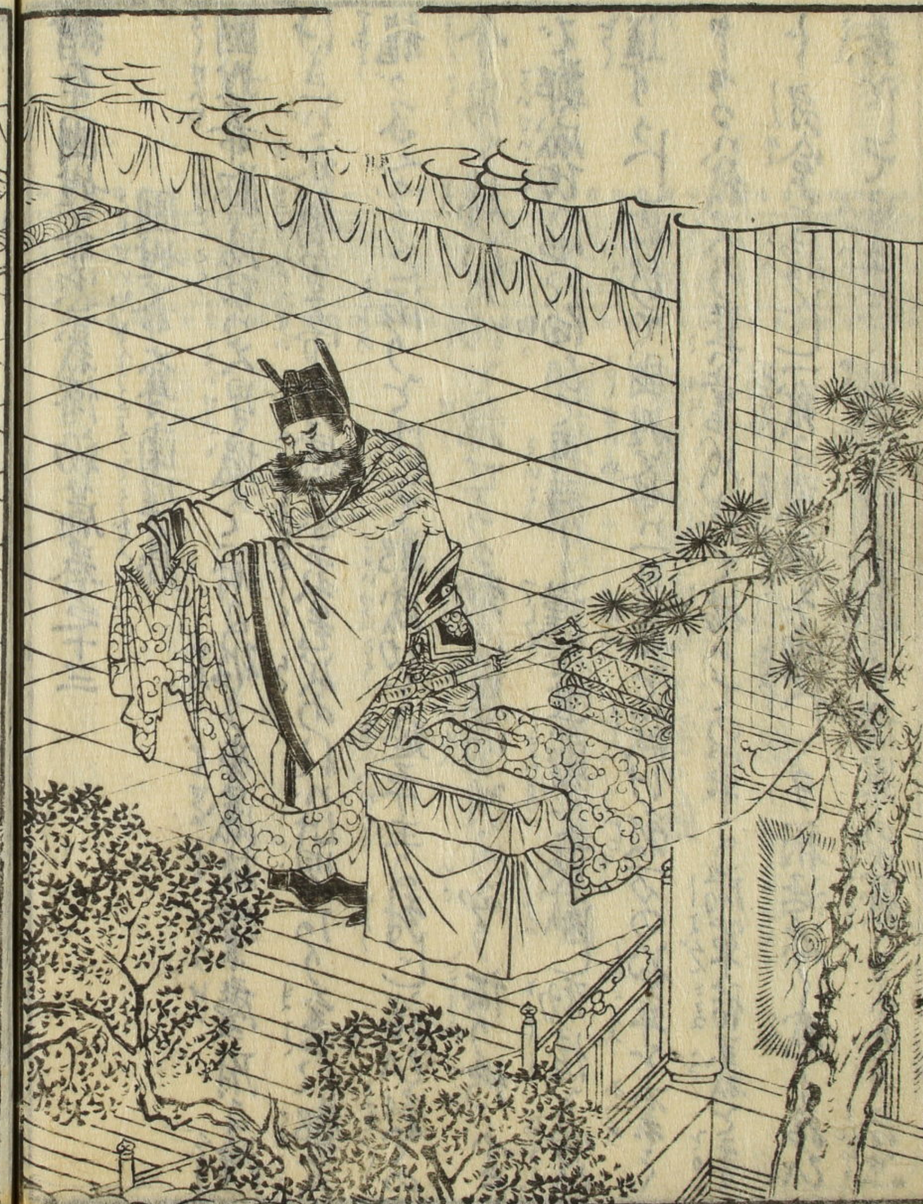
獨燕歎信右之國姓爺陣之圖


# 繪本國姓爺忠義傳初篇卷之十三

## 國姓爺奪南洋島

國姓爺鄭成功は大目城を一附り破り要害林肇慶府を降けさせ永曆皇帝御感甚敢なれば供奉たり奏して鄭芝龍父子と語りて鄭成功を延平王に封じ給ひ数くの金帛を賜ひ大功を称せらる勅使思明州に至り伺ひ奏して鄭成功は心に向ひて再辭し難で其既と以武勅使を留ひ送りうしぬ形て國姓爺は日宴を設け数万の將卒を召集やうるは我父の其業を繼て始めての軍を諸軍結義と言じ身命を捧じ一戦を亂敵を喝し朝廷深く感し給ひ吾を以て延平王に封じ給ふ乞願くは諸軍の忠義を表


國姓爺朝衆臣
令興軍士


忠義傳卷之十三

其典と勢ひ[illegible]やとく彼帝より綸旨[illegible]綸編[illegible]因縁八条
天[illegible]城[illegible]んどの場と云出[illegible]みづから製て番[illegible]軍中の典
[illegible]教方の軍率其度膳と感服し得る不の後僅[illegible]すの滿ぎを
ど[illegible]先刻天子の綸旨大ねの[illegible]と歎んで秘蔵[illegible]る所の新
仲[illegible]発ね進[illegible]出くやるい廣東の南洋海い周回八十里ふ[illegible]
[illegible]白川の濠濱[illegible]び三方い滄海後[illegible]城の正面流源[illegible]
馬乃足と云[illegible]真[illegible]不敵の要地なり[illegible]小港の軍師貝勢王[illegible]
の[illegible]許良と味方[illegible]膳け忠勇候[illegible]対[illegible]今港國の屋[illegible]
[illegible]ね軍[illegible]南洋海と責云[illegible]廣東の一港悪く[illegible]
[illegible]都芝と安て大[illegible]脱び者[illegible]南洋海と[illegible]
夷討[illegible]と[illegible]自三方金[illegible]乃道率と勝[illegible]

船[illegible]云[illegible]八月六日思明州を[illegible]南洋海へと押よせる中[illegible]
南洋海乃[illegible]三里斗[illegible]船と止り國姓[illegible]る味方兵糧
をつゝ[illegible]今夜[illegible]攻[illegible]彩[illegible]敵[illegible]防禦乃使
[illegible]士率皆金と[illegible]船を開く[illegible]も南洋海の後[illegible]
乃番兵城中[illegible]て曰く海濱[illegible]の義[illegible]何様敵の
夜討[illegible]兵と出[illegible]く防ぎ[illegible]中[illegible]附海を許良い奥勢王の
拒きよ[illegible]く福州[illegible]其叔父許源城を守[illegible]先と使
て今[illegible]押[illegible]き番[illegible]内
流とで[illegible]城ごもと[illegible]び[illegible]
夜[illegible]の番兵[illegible]
を[illegible]海城の[illegible]

國姓爺
攻南澤
島

を相續き山海を押へ せいそうを許源遠を招ひて是はじめて襄陽を先
備えねの妻子と城民の巖穴の義士自ら軍を率て金陵を引
率し要害と衆を歃と後國姓爺南澤の地を奪と共の味方を
顧てやろい歃兵脱を防禦の術へありと丸山ゆるぞ申くるを
急と美々小利也明方と結て討伐とて私の籌史を送り
びて消く捨つ申つて拒くう許源遠を比籌史のさ色をとて
大きに義ひ先海寇を遠ひはしいく神敵て慰こうせさて
自二を陸路の兵を以也くを松明と兼戒先を廻出さう
國姓爺遠を出たいまんと丸く大を歃ひ歃兵城中と出て防ん
ともろでや先君に城とるる者かう表考せく一討を敗せ
ひく敗の兵私小く浪と押切て彼陣小考や君や先を



ねる部義仲林順義先に馬と出せば三万の道率鶴翼に勢と並べ
義是こ如く押よとる城兵の先を徐賈七百金陵の甲兵と引率し
義一文字を討てうるを林順部義仲徐ぶと面と俄りさんぐ丸
実義ひ城兵多く討を進こうひて丸くうる軍ね徐賈大を怒
徐と捲て部義仲と馬と交戦ひ十余合をありるぶ義仲ぶ勇や
まうろん徐賈を一突を刺つぬき勢ひを奮じて敗側に落れ大ね
許源彩と丸るよう大を勝き羅刀を揺け陣前て馬を出く大きふ
罵つて曰く海中の英寇性に学け清朝の忠勇候許良を叙又許
源ぶ守る城なるぞ徐名何万の軍兵表来るこも抑くと奪べき
やよく回りて命助をと呼ろうろふ国姓爺も陣改を馬と踊らせ
後陣裏の胡奴吾氏彩くびや明朝永曆の対と受さる延平王國

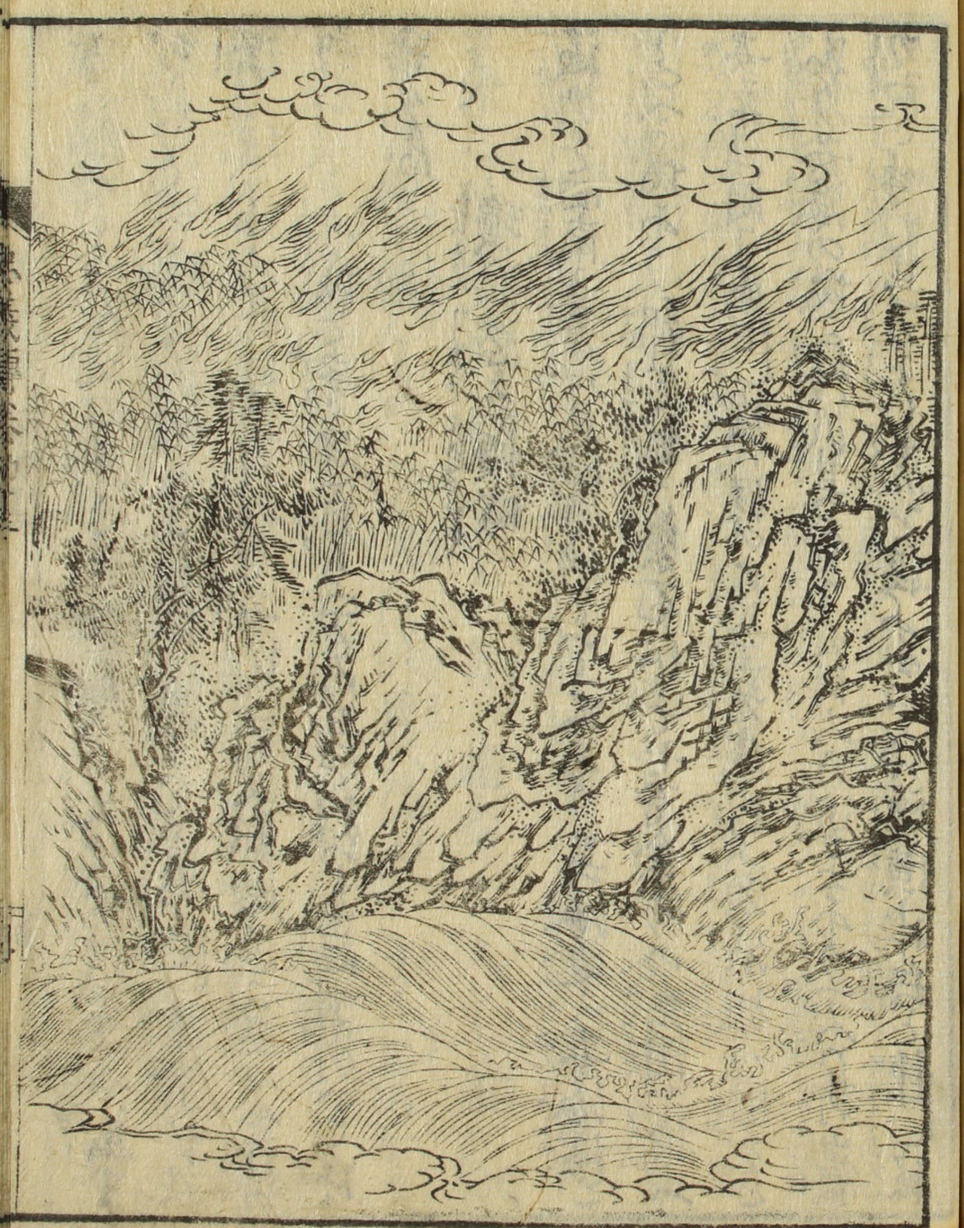
國姓爺陽
南洋島

姓希鄭成功こは我が父の國のゐる所なり討伐し又を受よこ樹の
日本刀をひらめかし斬てゝ落許源國姓希ぐ名所はて心驚き
六尺斗の鉄棒を旋し向ふ人ぐ國姓希電光のごとく走入く
只一刀に斬て落す義むべし許源織の甲二領を奪ふ希うしぐ國姓
希ぐ勇武日本の利刀に討ぬ両剛と成て乙びう城兵ぐ走るを
討ぬ者ぐ何ぐ暗しもち四べき槍所乗甲を脱に角八方に級孔
ぐ國姓希ぐ三万金錦迯ぐ追て二里斗斬ぐ鄭成功味方を
止め暗夜に長追をべゝぐ其に陣を布く息をつぐせゝり
漸東方斗もるぬ夜ば澤村の雞声ぐ死やうゆゝく東方ぐ見
明渡ぬ國姓希士卒をとゝ知して城門近く押寄るゆゝ防ぎの
兵一人もなく城の傍に在る萱花ぐ飯食を求む國姓希ぐ



見ぐ大に怒り城中の兵ぐ人ぐ出ぬ辞萱の葉ぐ
拾ぐ城門に破りて押入やゝく自ら大なる斧を振げ門扉を
向ふ二打三打ゝゝ破ぐ門忽開て抜ぐ
ゝる諸軍一は勇を奮ひ我先ぐ迯入る兵一人の死ぐ出なぬ
寂然ゝるごとく林順大ぐ怒で曰く迯る者ぐ去れ陣ぐ者ぐ
来れ婦女童ぐ者ぐ傷ぐと教ぐ呼びぐ教ぐ言ぐ者ぐ
附ぐ一卒来り告て曰く城後の海濱ぐ古教ぐ其中ぐ人語の
御者ぐ兎ぐ歌の伏兵ぐ國姓希先ぐ出て諸ぐ論ぜ
兵ぐ出て捉ぐ出ぐ知ぐ出ぐ命ぐ陣ぐ彼教の
中ぐ教百ぐ出ぐ来ぐ行ぐ出ぐ出ぐ教の
上ぐ奥ぐ巌窟の内ぐ女童の啼呼夢頻ぐ近出

國姓爺
故宋
屠
城
中
男
女



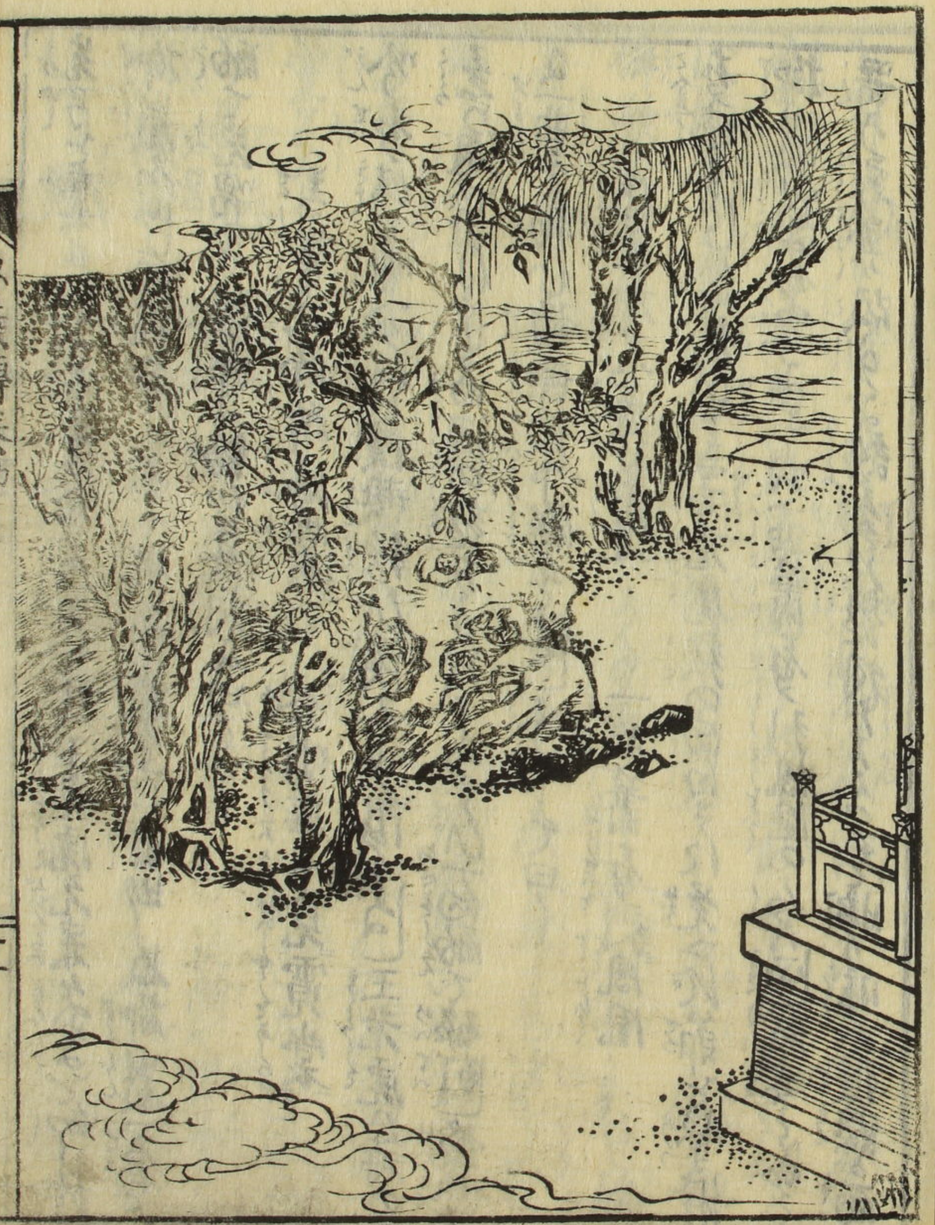
ぶ兵を引て思州へ帰ぬ

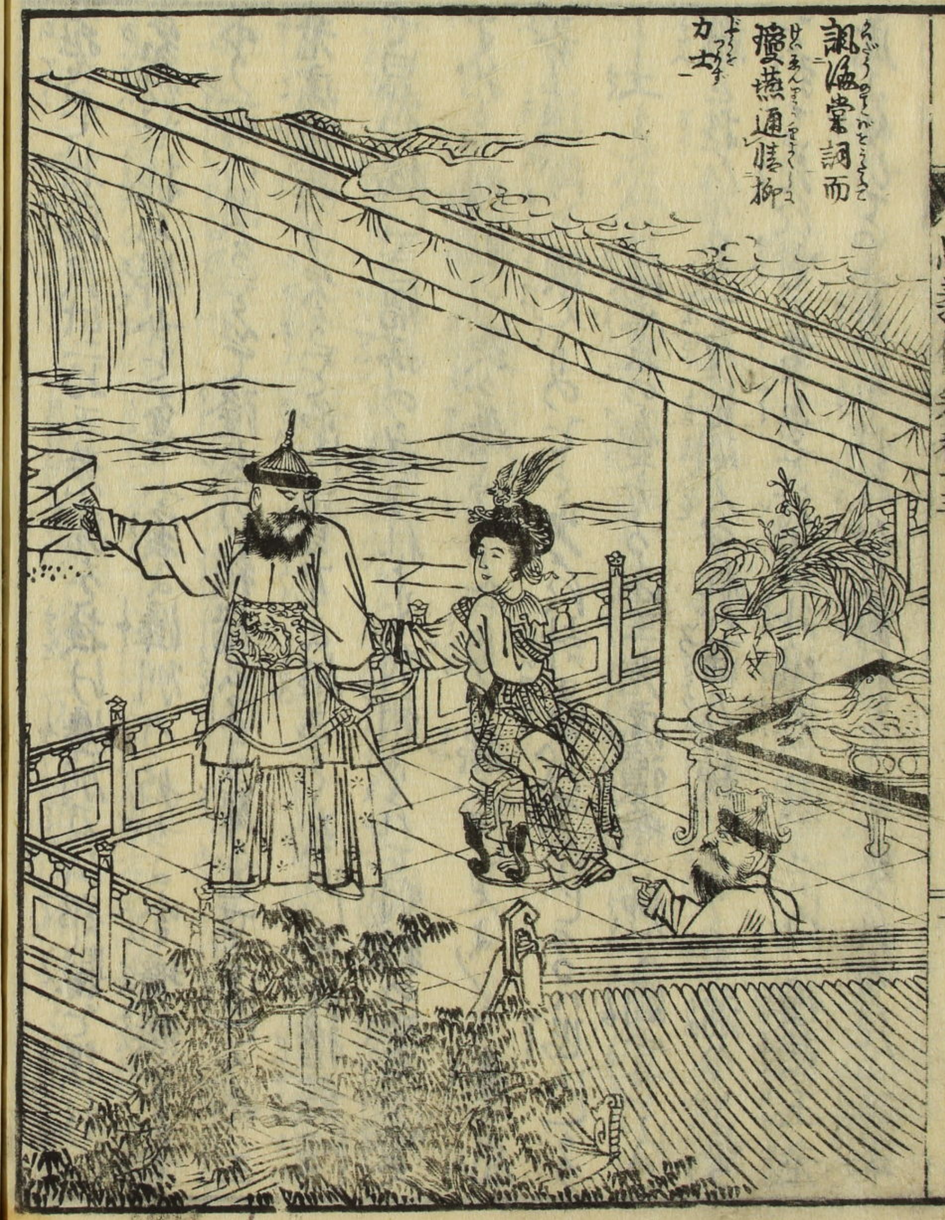
瓊燕恣を傾城

遼州を西南に去る八日路遼州と一所にあり其海辺に安海城と
云る城あり鄭芝龍が築て七百余所の兵固と擬へ
安平港四に属せし後に清の大将王老虎と云者遼州の国を
取り安海の城に住て其麓下に両人の勇士あり一人を柳巖
力士と呼て其力すく虎を投げ今一人を曾横神兵と称し然



れども村落に村二万王老虎を按け遼州及び郡縣を撲殺し
家財を掠め婦女を奪ふ家に遼州の妓女に瓊燕と云者
あり一時の国色にて隆武の朝諸公に寵愛せらるゝが今王
老虎瓊燕が美色を聞き賞中に招きて去らしめ瓊燕嘆
て曰我い嫁婦の身なれども明朝滅て明朝の粟を食へ
ず御るに難類の妻が妾にゝんいに自ら縊死し又よ〳〵妾が肩
并に二城と傾んりのとき出に計畫なくしるい恐ろう
し〳〵武日海棠の愛なる小王老虎瓊燕と俗に酒宴を
戯に招びるに一度皆胡人なれば西の弦を喝よる者なく号
を引て死に嘶る黄色と待るの外風流の戯を云ふ瓊燕王老
虎に向ひて云ふ我の中丈夫びい簫弦をこそ奏れ公の軍




諷海棠詞而
獨燕通情柳
力士

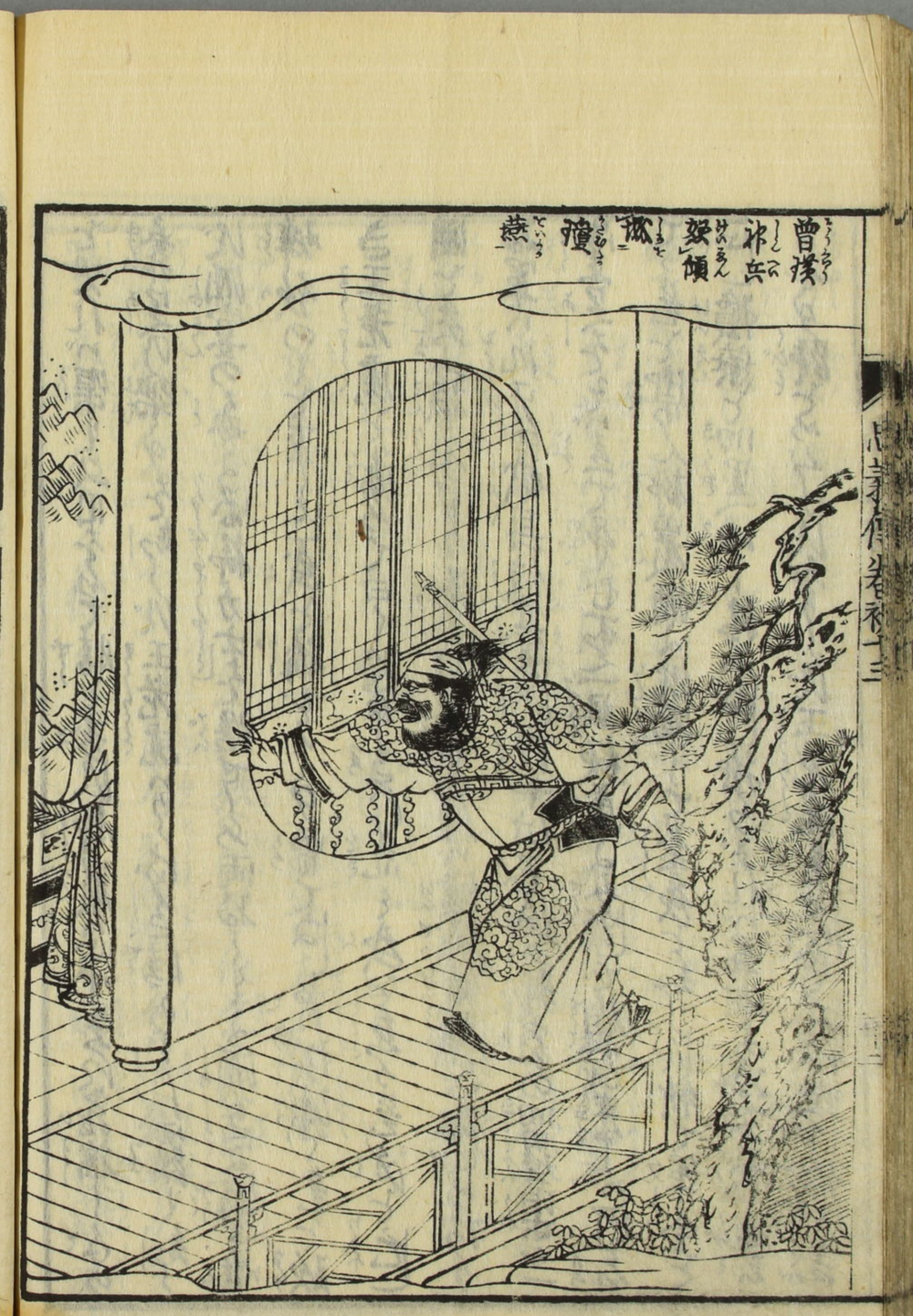
先弓と裏と納めたる李の曲を讽ひ終へ王老虎元来久家と知れば
柳巖を以て汎りせんと欲す彼柳巖力士と云出し故柳巖一座と
酌て先唱へ獲燕と勧む其詞に曰く

蒼茫孤降醉海棠　分明華下見霓裳
吟多清〻唱へ尽れば獲燕勧び懇ろに限り白王老虎が詩の
意に通ぜざれども曲調の艶なる成まつこと一曲酌で強ひ獲燕
に一曲を勧む獲燕俄て鶯を長吟して曰く

指点邪只蓬莱近　一曲簫聲引鳳凰

麦嗽こと能く節を撃府
柳巖私に初中に一曲簫聲引鳳凰の白い正我妻と知く
器り最も故に敵の強ひ獲燕が面

とあれば渠も又目を仰て膝と叩て柳巖が心中王老虎を嘲ること
尋常なるの踏りを知れば王老虎いかゝ成る膝ぞは露し知れ
ば酒宴の毎に柳力士を落せんと両ねて酒を濃き唯
強弱のこと事と成と揃ぶるに曾て曰く曾漢海く是と欲
き王老虎を落して曰く我が軍を荒き武と為る是と
国と先に根元なり良人を堂とし傾城傾国のいはゆる
我軍に凡牙の獄其仇甚を況や山安海の鄭家の四聖渠が一
堂是をそれ立て帝む不之一旦欲虚に乗じて襲ひ来れば何を
て是と御ん柳巖酒に洗酒して是を知れば斬て軍令と
正し獲燕と四星に命じ孤ちざれば軍中の我士悉く逃去
らんと踏とゝ成れば王老虎是と云て大に怒り怒る言


曹操
祁兵
袁傾
孤
殲
燕

甚不礼を獲燕す〻詩書と漢義理を通じ豈豈と懷遠懷國を
云ふ〻や張り以人と後を云ふ〻ふ〻と屋と立て惟幕の
内を入れ附奥の方を獲燕に了繁と俗の陰局と私に晉侯を
立て奉り獲燕が肩されをうの捆を階の上へ投ぜ入れ獲燕り
より幕の上へ〻〻を焼くして翻〻の燕のど階下へ〻〻て
自若として晉侯を怒て捕へんとする附後より柳巖を立て奉り
晉侯と組ぐ勢ひ〻〻力と震ひ操合が柳巖力士の勇力
を奉り欲せん統を晉侯を押殺せり王老虎大を欲び酒宴を
設く柳巖と称叢し金瘡とを〻〻獲燕けど〻王
老軍を代せ〻〻一言と傷ふべ〻〻そ一絶と絶に其河と曰
翩々何日去哺泥　胡國春寒兵管歸

体説王家重上客　俊々柳色好雙棲
詩乃意い獲燕我を燕を咏じ柳巖が姓と楊柳を色いつ
う胡國の客奉と通を出く書〻と結茲き柳の枝を止りて羽と
体んこふ言のごとり去ぬ〻も王老虎い吏を止ふ〻と知に
只獲燕が敏才と称び柳巖い名中焼ぐ〻〻焼恨として復一
も笑へても其幸のことをひ居りる

獲燕之國姓爺滅

永歴四三年八月の始め國姓爺が軍威日〻を盛んにして麾下
の兵卒十万を率り其名南海を吼響ろう附を國姓爺法
令と集ひてヤるい澤州の妾海城い又鄭芝龍が藥石に〻て吾
兄と順後せん〻〻ふる民近来小和酒を〻て死を兵馬の備へと

國姓爺
攻安海
城

をうよ毛王の戦を接る而て遂に征伐しらよ敗
ねる皆毛よりじ十又万の軍勢思明州と進發し又日と経て漳
州の海濱に押寄せうと大ねる王老虎いとひ設けざる歌の大軍と見
て肝を冷し城兵を撫を奪ひ防ぎ戦ひんとすれども国姓爺
諸軍に向ひて云へ我今日戦ひの占卦を震の卦と得たり
震い雷と雷いまだみつく形なし此卦によりて今月月晴に系
じ寄兵を以て責討い歌必ず勝べるうん諸ねる信服し
軍を進ん用意を為べしと廿二日梅雨始晴て海雲雲と
流れ山霧茫々と似く路もちがと国姓爺諸兵に下知して相言と
を定め数万の松明を点くに拵せ然に先に火を点ぜば城門に
もつ〳〵始め燃えべと為ん投と嘶ぐ相寄ろ城中に今



歌城に歌乃ようひとはそひようび諸軍本城に行向ま
防戦の評議をうぐ方ぐ国姓爺が大軍近くと寄来り
数万の松明一時に火と点ぐ間とどろとうと山鳴り海嘯
籌乃光い濁天の星ようと多く城中の兵大に驚き拒ひとか
ひら矢鉄砲を放ち城ぬまと防ぎる国姓爺が先鋒の大ねる戦
擬とら者士卒に下知三方に寄る松明と城門に投りけ然べ
猶よるる彩に焔く怒涛掘に火移り爆くと燒ようぬ消
城中の猛ね柳巌い盛の甲冑と被掛鑼弱に膝に狼牙槍と
提げ巌く士卒と下知もるに軍ね阿義嗟和門より出来
歌軍徳門に火と放ち黒煙り城内に充し防禦乃術に
うり柳巌ねるさ言とうて繰ぐ乃ん烟の中に延平王乃

今旗ひるがへす國姓爺が麾下の捷智飛天龍林勝夏仲の
両将左右に備へ一斉に鬨の声を挙げ記る柳巖猛牙槍をまはし雲
霞のごとく大勢の中に面もふらず突入るに方八面の敵例に其
勢ひ天神のごとく寄手の軍卒死傷の者数を知らず突入れば軍
将夏仲捨丸接つて柳力士と馬を並べ二十余合戦ひしが夏仲が
捨法次第に丸を敵がうつ刀を投げ馬とと
もに切かけ来り夏仲を接けてつぎ戦ふ柳巖両人とねらひ
要戦もろもろ三十余合の勇力をつくす乱色に飛天龍忽弱るき
味方の大将討とるとの白旗と揮て下知をなせば國姓爺が旗下の
大将第礼揚祖義捷林順張英長俊等の強将数方の軍卒と猛
て城兵と中より内囲の錦旗一斉の矢炮と発ひの両方より攻撃くさ



も猛勇の柳力士今の叫ぶと馬引入て本城の逆襲の門を
閉じて石炮と打出ひの殺しく出珠の来るの霰の散の似う
寄るの大軍出もろもろて退きるる國姓爺味方の下知るる我
軍七分の勝利と得うの本城と責入る別の計略と謀し只一
息の責接ぎ攻軍攻口を退き陣へと堅めて休息とて軍
とまどの十里去て寨と下兵馬の勇と休めるる扨も國姓爺い
諸大将集の議るの今味方の大軍急の迫て責打の
窮鼠猫と噛の悪あん唯よく猛建の異の兵と伏援兵の路と
新海の小軍と毛兵粮と運へるくと遮り止めば安海の城自ら
滅ぶ諸将皆之の同じ異議の二方余勢の兵死接け海口の
出く稼と奪いむの陳義の二方余勢と与へ猛別の捷の地

柳巖大
戰夏仲
林勝

援兵を遣はし城の四方に柵を作て陣屋を造り茅を刈
蓑を編集め雨露を防ぐ備へをなし城外三十・余里が間連綿
と寨を構へ完き長城を築しごとく宿陣の隙間なき城柵
王老虎い柳巖と絶へず歌寨の形勢をかんがへ相議して曰く是迄
城中の糧を計り遣ひ援兵を乞ひ兵粮を貯ひ
そのかの馬を絶て後別の援兵を乞ひ
兵をも捕ひ二人も別者なし王老虎の中去の落
獲燕柳巖等酒を飲ませて賊軍の
諸将等悉く来て諸ろ〳〵い今暁城中の粮米十日の
以来南の風のくさ打續吹ども
必ず必ず敵兵に奪ひ取るべ拙き城中獲燕と始

と諸の妓女を用の糧と費ひ先曹操兵を
諸ろて不意を起せり祁兵を言符節と合せるごとく獲
燕が後を城より出軍中の眼を正し孫人柳巖別をみて心中
私に喜び獲燕城を出ひ奪ひ取て己が妻にせんものと思ひ
と企つてやるい諸ろの論議の程を軍中の婦女を
るい級乞の基なり某邪り四里を送り酒肉を
を受く曰く何ぞ乞程の小なる柳巖軍と労をべき獲燕
城と傾け流る衆軍の悪む所吾軍を場りて一刀を断る
新て軍中の兵を達せん柳巖時て曰く獲燕何ぞ城を
傾んや諸軍結曰く王老軍先を諸ろと網落ろ柳力士を
捉て曹祁兵を殺せり乞より後城中軍令孔を正ろ

獲燕欺清
ねし士らく國姓爺陳

やい歩卒ゟ乗ゟ乗く酒ゟ肴ゟ軍士甲冑と贈し酒と
沽ふ歌い舞ゟ囲し て寨と固めく兵糧の蓄ゟと候たゝ張
良陳平再せどゟも其元と赤何せんや故ゝ塩中の軍卒
擄燕とす翠くゟ切て其肉を喰んと欲ス王花虎花虎と
て言て然りゝ附ゟ擄燕帷と揚て立出王花虎ゟ向ひヤクゟ
若ゞ一日乃情ゟ妻ゞ百多の命と変ゝ諸軍の待ふ和吾何で猶
せん速ゟ死して衆人乃心と易くせん然ども今我死ようゝ
欲乃退くゟ死さらくゝ変て死ゟる命と皆く偽り欲乃陣
中ゟ乗りゟ乗ゟ出て敗きゟせ大ゟ国姓爺と称して王花軍乃
厚恩と報ふ色 諸軍皆と涙て大ゟ笑ひ擄燕ゞ妻吾ゟ購る
ゟゟゟし渠い一箇の妖婦何そ十万の大ゟ兵数〻得ん擄燕

の曰く吾ゟ人欲乃陣中ゟ強くゟもせて還ゟゞ死ゟ何
ゟ ゟも死ゟる命ゟく斬て諸軍の心と安んじ後ゟ附ゟ赤龍興数
と死ゟ眼い猛猛乃ごく身の長七尺ゟ余乃壮士偃月刀と引
さげ大ゟ呼で曰く吾ゟ者監軍赤龍興ゟり女ゟよう命と
捨く欲陣ゟ入利害ゟ知ゟん と欲ス先誠ゟ吾一刀ゟ受て
後死ゟ欲け附擄燕心ゟ乃ゟ乃揚ゟ玉乃ゟ揚と玉数雲を
整く陣と作く死ゟ者んと欲ス赤龍興い偃月刀と揚てむう人
進ゟ今や附ゟ婦一刀の中ゟ命と落ス らんと欲ゟ和乃柳巌
座と立て龍興と押陣女ゟゞ忠ゟ脱ゟ露ゟう暫く殺して
渠ゞ活ゟまゟ せ欲言ゟ色 り人王花虎も御ゟ色と拒ゟて
放て殺ゟる ゟを免さゞ赤龍興と始ゟ諸軍驚ゟいとゟべき

ようやく白眼はなく退けれ擾燕王発處をいとまを告げ了鑿両人を引ぎして國姓爺ぞ陣へ馳さろる





畫圖　浪華法橋玉山

彫刻師

井上治兵衛
樋口源兵衛
市田次郎兵衛
池田長右衛門

文化元甲子九月成刻發行

慈敬書庫

## 江都書肆

四日市　松本平助

心齋橋筋　勝尾屋六兵衛
同　柏原屋清右衛門
同　柏原屋與左衛門
同　柏原屋嘉助
同　柏原屋源兵衛

## 浪速書肆

## 書林

京都寺町通佛光寺　河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　貳丁目　山城屋佐兵衛
同　貳丁目　須原屋新兵衛
同　南傳馬町壹丁目　山城屋政吉
同　下谷御成道　英文藏
同　大傳馬町貳丁目　丁子屋平兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　和泉屋吉兵衛
大阪心齋橋筋本町角　河内屋藤兵衛
大阪心齋橋筋博勞町角　河内屋茂兵衛扱